

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



第八十三卷第四号
日本幼稚園協会

4

幼児の動きのリズム

新版 自由表現ABC

子どもの創造性を育てる自由表現

感情のおもむくままを自分の体の動きで示す自由表現は、子どもの創造性を育てる第一歩になります。

本書では、子どもの単純な自由表現から出発し、それを発展追求して肉づけし、最終的には舞踊劇の作品に仕上げるまでをわかりやすく解説しました。

振付け、楽譜をつけ、保育者の方々が使いやすいよう編集してあります。

(全国学校図書館協議会選定図書)

藤田妙子・著

B5判・128頁・定価1,300円

新版 幼児の生活とカリキュラム

三層構造の生活プラン

子どもの社会性と集団を育てるために

カリキュラムは形だけつくったのでは意味がありません。園生活において、子どもたちの生活がどのように展開されていくか、その方向づけをするものであつてほしい。

著者は子どもたちの園生活を、「課題活動」「遊び」「生活の仕事」の三層でとらえ、実践を通じて、子どもの生活集団と社会性の発達をあとづけていきます。

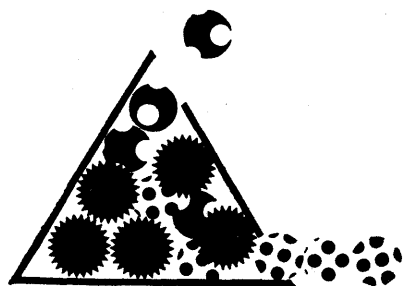
大場牧夫・編著

B5判・216頁・定価1,800円

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼 児 の 教 育



第八十三卷 第四号

幼児の教育目次

—第八十三卷 四月号—

© 1984

日本幼稚園協会

これからの子どものために……………関口はつ江…(4)

私の幼児教育論

—子どもの文化としての音楽と遊び—……………永田栄一…(6)

園長室の窓から……………市原豊子…(15)

◆写真に寄せて……………阿久澤栄太郎…(18)

年少讃歌 Sちゃんに……………藤本美穂子…(20)



私の保育

——春に想うこと——……………江口明子…(28)

韓国幼稚園教育(三)

——戦後の動向——……………李相琴…(34)

研究会に参加して……………守永英子…(44)

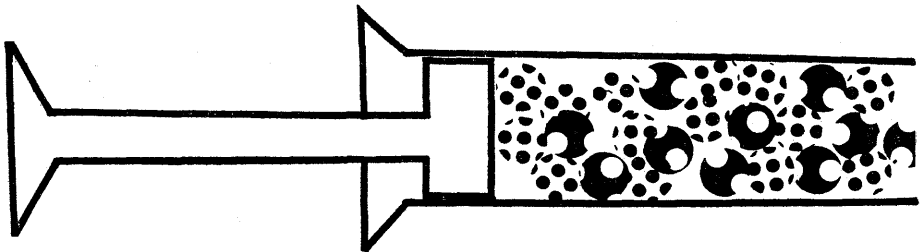
昔話への招待①

『瓜姫』の昔話をめぐって……………上野泰子…(46)

ニュージーランドにおける就学前教育の

歴史ならびに現状(六)……………松川由紀子…(53)

表紙・安井 淡
表紙題字・比田井和子
カット・福田 理恵



これからの子どものために

関口はつ江

四月、幼稚園も新しい幼児を迎える。各々の園にたどたどしく、また柔らかなざわめきがやってくる、と、わくわくする思いである。

しかし、今年も多くの子ども達をやさしく育てたいいくつかの園が、やむなく園を休んだり、閉じたりする事態も起きている。このような時であるからこそ、園児集めのために、世の中の流れに迎合するのではなく、大切なものを見極め、確かなものを掴まなければならないように思う。

今の幼稚園では、多くの場合、幼児は生活や文化の断片を訓練されている。集団行動、音楽や体育、文字や数等々。しかし、人間の本质や生活の総体にかかわる学習はどうなのだろうか。

現代は価値の多様化の時代と云われる。いろいろな姿や振舞いをする若者が混然と共存し得、社会的

な地位や役割による在り様があいまいになり、「教師も当りはずれ」と云われるように、行為の責任が個に帰着するようになってきた。「人間的である」ということが「私的である」とことと一体化され、社会的な役割にそれらしい思い入れが消え、役割行動の基準すらもまた、各々が勝手に作り出してしまっている。育児放棄の母親や、子どもと対話のできない教師などを社会が認め、温存してしまっている。

おとな達のこの身勝手さと、幼児に執拗な迄に画一的な訓練を強いることの落差は、人間が自己や社会を見極め、自らの願望を主体的に昇華するようになる前に、自らを統制する外側の枠組みをはずしてはならないとの直感によるものであろうか。

しかし、子どもが自分を知り、自分で考え、自分で行動することを教えられずに、おとなになって、

価値の多様化の名のもとに、個人の自由と権利が最優先される社会に送り出された時、はたして社会の中で自分の位置を作り出せるのだろうか。

ある作家が最近、「愛犬が死んで涙に暮れているうちに、獣医を告訴することを考えついたら、忽ち涙は乾いた。」という人の話を引き合いにし今の日本では己の幸福を守るためには他人を宥してはならないこと、我々の知識は損得にだけしか使われないこと、を嘆いていた。現代文明は親が死を願う程の未熟児でさえも生きることを可能にした。こうした生物界の基本原理である適者生存の原理を越えてしまった時代であるからこそ、逆に生命の尊さがわからなくなっているのだと思う。

今の子ども達は、本当に自分にとって大切なものは何かを知ること、大切なものを自分の内側で守り、育てること、を十分には教えられない。価値あるものは形をもち、他と交換可能な客観性を備えたものであることを、幼い時から教え込まれて育て

ば、愛するものの死をかけがえのない事実として、その苦悩を進んで引き受け、そこから新しい自己を生み出すような精神的な営みが、更に深く生きることの欲びにつながることを信ずることはできないであろう。愛犬はおるか愛児の死でさえも売り渡せるのは不思議ではない。

次の時代は哲学と宗教の時代といわれているけれども、小賢しさが先に立った、小さなおとなのような偏った子どもがもてはやされ、自らの身体と感覚で真の価値を追い求めようとする子どもの活動が、当り前であるが故に軽視される限り、新しい時代の創造は難しいように思う。

これからの未来を切り開く力となる人間の想像、創造力は、空飛ぶ風船に空飛ぶ思いを、土の中のみにずに生きることへのいとおしさを感ずることができるとような、子どもの生き生きとした発想の延長線上にあることを自覚して、子どもらしい生活を保障する幼稚園を目指したいものである。

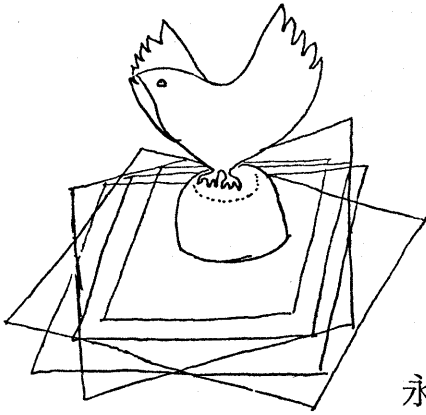
(郡山女子短期大学)

私の幼児教育論

——子どもの文化としての

音楽と遊び——

永田 栄一



はじめに

文化というものは、本来、人が生きる目的のなかで、自然に創り出される智慧というものの、子どもならば、楽しく友だちとつきあっていくための遊び、そのようなものが文化の土台であろうと考えます。ところが、いわゆる文明の進歩のなかで、人の素朴な生き方としての文化が次第に複雑になり、ゆがんできているという現実があります。

それでは、一方の教育、子どもの発達を促さなければならない筈の教育はどうかというと、明治以来の西欧化の流れのなかで、日本の素朴な文化を置きざりにして、新しい文化を移入し、教育が文化をも支配するという大きな力をもってきました。

現代のように、マスコミ文化という大きな力が現われますと、教育だけが文化を支配しているとは言えないのは当然ですが、直接目の前にいる子どもを管理し、文化規制をしようという力は、今日でも、相変らず、もちつづけていると考えなければなりません。

特に、子どもたちの心身のひずみが問題となっている今日では、一方のマスコミ文化だけを敵視するのではなく、子どもの前に大きく立ちかえる文化も教育も、原点に立ちかえり、人がまともに生きるためのもの、子どもの発達を真に促すもの、とならなければならないのです。

1

矛盾の多い唱歌の始まり

さて、文化と教育との関わりを、子どもの歌を中心に考えていこうと思います。

まず、歴史的にふり返ってみますと、ドレミファソラシドという西洋音階や、ファとシを抜いた、いわゆるヨ

ナぬき音階によって作られた唱歌は、日本の自然発生的な文化ではなく、学校や幼児教育の場、つまり公的機関によって、子どもたちに与えられてきたものです。

子どもたちの遊びであり、ドレミファとは違ったラドレという自然発生的な音階をもつ、子どもの文化としてのわらべうたは見捨てられ、自発的な遊びが生きた表現を生むという、もっとも基本的なことを教育の土台とすることができなかったのです。

当時の教育の先覚者たちは、ヨーロッパの近代思想、たとえば、子どもの内発性を尊重しようというフレール、その他から、子どもたちの、より豊かな成長を促す理念を学び、その考えは教育に生かされ、一方において成果は認められるのですが、特に唱歌教育においては、その具体化の段階で、子どもが無視されたと言ってしまうでしょう。

明治のはじめに、わらべうたを捨てようとしたことは、もっとも根本的な問題であるし、やがて、唱歌が修身教育の手段となってしまうことも大きな問題であるこ

とは言うまでもないのですが、西洋音階を移入するにあたって、種々の問題があったのです。

その一つは、長音階は子どもを健全にし、短音階は子どもを無力にする、と考えてしまったことです。それは、当時、文部省の音楽取調掛長の職にあった伊沢修二が、明治14年に出した『音楽取調成績申報書』のなかで言っていることです。そして、文教最進の国ドイツは長音階が主で、未進の国のハンガリーやロシアは短調が多く、その一事をもっとしても、教育に用うべき楽曲は、長音階に帰すべし、と断定しているのです。日本の子ども文化、わらべうたを無視したばかりではなく、長音階や短音階という西洋音楽文化に関わることでさえ、強引な文化規定をしてしまったのです。

ところが、どうでしょう。現代でも、教育用の歌は、長音階によるものが大多数なのですが、一方、子どもたちに受け入れられているテレビマンガの歌などでは、短音階のものが意外と多いのです。そのことの意味を考えてみる必要があるのですが、その前に、もう少し、歴史

的事実を述べておきましょう。

支配できない音楽文化

明治34年には、子どもの歌とは言えないかも知れませんが、滝廉太郎が「荒城の月」を短音階で作ります。明治35年には、旧制第一高等学校の寮歌として「ああ玉杯に花うけて」が生まれます。これは「ドドドミ、レミソ」と、長音階の楽譜で書かれたのですが、多くの人たちにうたわれているうちに、「ラララド、シドミ」と、短音階に変わってしまい、定着しました。

大正には、中山晋平が、わらべうた的な短音階で「あの町この町」（ラララソ、ラドレド……）を作り、子どもたちの心をとらえました。大正時代には、唱歌と相對して、民間側から生まれた子どもの歌は童謡と呼ばれましたが、弘田龍太郎曲の「雨」（雨がふります雨がふる……）など、比較的多く、短音階のものが現われます。

昭和になり、戦争にかりたてるために軍歌がたくさん作られますが、東京日日と大阪毎日（現在の毎日新聞社）

で募集して一等に当選した軍歌「進軍の歌」は長音階による勇ましい曲ですが、ほとんど歌われず、二等の方の、短音階の曲「露営の歌」(勝ってくるぞと勇ましく……)が、国民の心に訴えました。

さて、敗戦で平和が甦り、日本中に明るい気分をもたらした「リンゴの歌」(赤いリンゴに、くちびるよせて……)、これまた、短音階の曲です。

もちろん、短音階の曲が良いと断定しようとしているわけではありません。そうではなく、上からの力によって音楽文化は支配しきれものではない、という事実をみてきたのです。

2

子どもをとりまく現代の歌

ここで、主として、現代のテレビマンガの歌をとりあげてみることにします。この六月に、松江市市内の四つの幼稚園で、学生がインタビュールした録音テープを聞いてみますと、子どもたちは、実に多くのテレビ番組を見て

いて、そのなかのたくさんさんの歌を知っています。

「アラレちゃん」「ウルトラマン」「ヤットデタマン」「ダイナマン」「ドラえもん」「デンジマン」「イタダキマン」「ガンダム」「うる星やつら」「宇宙戦艦大和」「ユカイツーカーイ怪物くん」「忍者はとりくん」など、とても、その内容の良否まで問うゆとりはありません。当然、テレビにしばられて子どもたちが、外で遊ぶ時間を奪われているのではないか、という問題もあります。しかし、ここでは、それらの歌の音楽文化としての意味にしばって考えることにします。

そこで、今あげたテレビマンガのなかの歌で、手に入った31曲の楽譜を調べてみますと、途中で長調に転調しているものも含めて、13曲が短調の曲です。今だに子どもたちに人気がつづいている「ウルトラマン」では、「ウルトラの父がいる……」と歌う「ウルトラマンタロー」は短調です。ほかに「ウルトラマンA」^{エイズ}「ウルトラマンレオ」なども短調で、調べたウルトラマンシリーズの歌9曲中の3曲が短調です。

「ドラえもん」では、「ドラえもん音頭」が日本音階的、わらべうた的な短調です。ほかの例では、「ダイナマン」「忍者はとりくん」「ガンダム」「宇宙戦艦大和」などの歌が、ほとんど短調です。

このように、テレビマンガの歌は短調の曲が比較的多いのですが、実は、長調の曲でも、マイナー和音（短三和音）が比較的多く用いられています。その和音に支えられて、わらべうた的旋律が、よく現われるというのも特徴的です。

西洋音階とわらべうたの音階

西洋音階が、もう日本のものとなった現代ですが、長音階を主とする曲にせよ、短音階を主とする曲にせよ、マスコミ文化の歌の方が、教育用の歌とくらべますと、わらべうた的要素が含まれているということは重要です。

まず「アアレちゃん」では、そのなかの歌「ワイワイワールド」の歌い出しは、「来ーたぞ、来たぞ、アーラ

レちゃん」（ソーミミ、ミレド、ラーレレレレー）というように、一小節目は、長調の主和音を構成する旋律「ソーミミ」ですが、二小節目は、「ラーレレレレー」と歌い、マイナー和音（Ⅱの和音）に支えられています。その部分に限って言えば、わらべうた的です。

「ドラえもん音頭」「はとりくん音頭」「アアレちゃん音頭」など、はじめから、日本の表現を考えているものは言うまでもないのですが、その他の歌では、たとえば、「怪物くん」の「あくまかいじゅう、なんでもこーい」（レレミレドラド、レーレレレー）の部分などは、わらべうたの「レドラドレ」の音階を用いています。

テレビマンガではありませんが、少し古い例では、ピンクレディの「T・F・O」のなかの「手をみつめて、みつめるだけでー」（ミミレドレド、レドレド、レミラー）なども、上手にわらべうたの音階をとり入れています。

このように、テレビマンガの歌、あるいは歌謡曲やフォークソングと呼ばれている歌は比較的短調のものが多

く、長調であっても、マイナー和音が多く用いられ、旋律の一部分に、わらべうたの音階をくみこませている曲が発見できます。そのことに気づきにくいのは、リズムが現代的であつたりして、自然発生的なわらべうたとは、当然異なるからです。

以上のように見てきますと、教育用の歌も最近では多様になってきましたので一概にはきめられないのですが、一般的には、あまり現代的でもなく、また、一面、あまり日本的でもないと言えます。そして、一方のテレビ文化の方が、あくまで音楽様式に限って言うならば、日本적であり、かつ現代的であり、日本の文化、子どもの文化形式に関わる大切なものを見出せるということにもなります。

3

楽譜のリズムと遊びのリズム

音楽のなかで、特に目に見えにくい文化として音階をとりあげてきたのですが、ここで、さらに、リズムにつ

いて考えてみることにします。

明治以来の西洋音楽中心の音楽教育では、リズムという、楽譜に書かれた四分音符や八分音符による音の長短の組み合わせというとらえ方をして、その楽譜を「タンタタン」と再現させたり、「ドン、チャッ、チャッ」というリズムを打たせて3拍子感を育てる、というように単純に考えてしまいがちでした。

リズムとは、もっと生きたものです。たとえば「花いちもんめ」で、負けた方のグループの「ま／けーてくやしい……」という表現では、「ま」が踏み出す足より早く、ごく自然に、小節線の前に16分音符としてとび出る弱起的表現となり、次の「けーて」も、時には複付点で音符で表現されます。また、友だち同士が何か約束する時の「指きりげんまん」は、基本的には2拍子のリズム進行ですが、「うそついたら、はりせんぼん」のところだけは、どうしても、記譜の際、3拍子で書くのが自然な表現です。

楽譜は表現の記録として生まれたことを改めて思い起

こしてみる必要があります。そして、子どもたちに再現させようとして用意する楽譜の、目で見てのやさしいリズムより、遊びのなかのリズムは、記譜上では複雑なリズムも多いということを知らなければなりません。

曲のフレーズも、教育用の歌では、4小節プラス4小節という整然としたフレーズが多いのですが、遊びのなかで、子どもたちは、多様な表現を心をおどらせて体験します。たとえば「ポコベン」というかくれんぼでは、伝えられている土地によって違いますが、「ポコベンポコベン、だーれがつつついた、ポコベン」というように、この表現の主部「だーれがつつついた」が、3小節で表現され、その前後に「ポコベン」がきます。これはごく自然なことばの必然のリズムであり、遊びの生きた表現です。

ところが、その部分を「だーれがつつついたーでしょ」と、4小節にリズムを拡大して伝えられている地方もあります。そのどちらも、それぞれに生きたリズムであり、子どもたちが伝え、所有する文化としての表現、

わらべうたです。

さて、すでに、音階の面から、テレビマンガなどマスコミの歌の、わらべうたとの近似性について述べたのですが、リズムの観点からも同じようなことが言えます。つまり、教育で用いられる平均的な教材より、マスコミの歌の方が、楽譜の上で複雑なリズムが現われ、奇数小節のフレーズもよく見られます。それは、わらべうたの表現と同じように、ことばが優先されたり、表現の自由があるからです。

音楽の基礎体験としての遊び

とかく批判の対象となりがちなマスコミ文化の歌をとりあげ、音階の面から、あるいはリズムの面から、子どもの文化としての音楽を考え、むしろ、教育としての音楽を問い直してみよう、と強調してきました。歌に限っても、もっと多様な面から考えなければならぬし、当然、テレビ文化をすべて良いとしているわけではありません。教育であれ、テレビ文化であれ、それは、子どもの

上に大きいのかかる、大人が与える文化です。そして、受動的な娯楽としてのテレビが、子どもたちの能動的な遊びを奪っていることも重大です。

そこで、大人が与える文化としての音楽に対して、子ども自身が伝え、創る文化である遊び、わらべうたの見直しが大切になってくるのです。しかし、それは、わらべうたの音階やリズムが、歌のなかで生かされていればそれでよいというのではなく、やはり、子どもたちの心をおどらせ、体を動かす遊びとしてのわらべうたをとらえ直すことが、現代の幼児教育においても、たいへん重要な課題です。

わらべうたは、とかく大人の側から懐古的にとらえられがちですが、日本語と共に、遊びと共に、現代に生きる子どもの文化です。子どもたちの日常的なじゃんけんを例としても、音程不確定の表現の場合もありますが、時には「じゃ・ん・け・ん・ポイ」（レドラドレ）と、わらべうたの音階で表現されます。

じゃんけんでは、よくせきこんだ表現が行なわれ、胸

の高まりと共に、テンポが次第に速くなることもあります。速度変化は他の遊びでもみられますが、それは遊びの必然としての速度変化であり、やがて音楽の演奏に要求されるアジタートやアチュレランドなどの基礎体験と言えるものです。

また「あぶくたった」や「今年のぼたん」などの遊びのように、遊びのクライマックスを迎える瞬間に向けての鬼と子の対話やドラマ、そして、そのくり返しも大きなリズム体験であり、緊張に満ちた遊びの展開は、子ども同士の心を結びつけます。ホイジンガは、遊びの要素である緊張、変化、対照、解決などは美学的領域のことばに属していると言い、音楽することと、遊ぶことの共通性を見出していますが、遊びのなかの必然的な表現——必ずしも、せまい意味の音階やリズムだけではない——の形式が、音楽の基礎体験として大変重要なのです。

おわりに

心と体のひずみが指摘される子どもの状況をふまえ

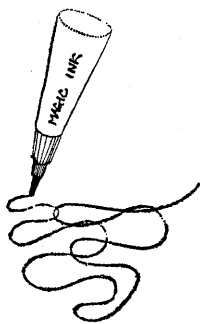
て、改めて、遊びを尊重することから始めよう、と提言することになります。遊びは子どもの文化であり、その体験は、広く人間教育の基礎でもあります。ただ、従来からの幼児教育でのおゆうぎ、あるいは、歌遊び、リズム遊びと呼ばれるものが、与える文化としての教材であるならば、それが、伝え合う文化と同じように、真に子どももの文化として生き、子どもの発達、あるいは文化創造にどう関わるかを、検討してみなければならないでしょう。

かつては地域の文化であった伝承遊びが、自由な保育の場で伝えられ、子どもたちの内発的活動を魅らすことが、一方における与える教材の文化性を問い直すことと共に、これからの幼児教育において、重要な課題とならなければなりません。

本稿は「第13回松江夏期保育大学」（島根保育学会、'83・7・23～24）で行なわれたシンポジウム「マスコミ文化と幼児教育」で、提案者の一人として筆者が発言し

たものを元に、加筆してまとめたものです。なお、不分な点は、拙著『遊びとわらべうた——子どもの文化の見直し』（青木書店、82年2月刊）を参照してください。幸いです。

（島根大学）

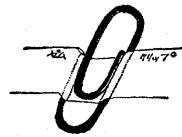


園長室の窓から

一、実質体験

「子どもは幼稚園に来て何を体験しているのだろうか」という視点は、ひどく素朴ではあるけれども、とても大切なことだと思う。そしてこのテーマこそ、私が園を経営するに当って一貫して流れている保育への姿勢でもある。

ここでのいう体験は、現象として現われる、折紙をしたとか、リレーをしたとか、もちつき大会に参加したという「活動体験」だけでなく、それに伴う、



市原 豊子

喜びや悲しみ、くやしき、おもしろさ、愛情や満足などの情緒や情感などの「心の体験」を含めたものを意味する。

一人の子どもが全体として持った体験を、私は見せかけの体験と区別して、実質体験と呼ぶ。この実質体験は、与え手の教師の立場のねらいや目標や計画からの見方ではなく、受け手としての子どもの立場に立った見方であり、とらえ方である。いいかえれば、「それはその子どもにとって何であつたか」ということになる。活動の内容や方法によっては、

およそ教師の意図したねらいとはかけはなれた実質体験を子どもたちはしている。

二、しかられたり、おどかされたり、不安 ていっぱいになる活動

幼稚園がたのしく、充実した活動で充たされて欲しいのは切なる願いである。しかし実態は必ずしもそうではない。特に運動会や、生活発表会などの、他の人に見せる大きな行事の前はもとより、ごく普通の日常生活の中でさえ、おそろしい活動はけっこうある。次の例は少し古い観察事例であるが、一斉課題活動で折紙のせみを教えていたものである。

先生 「まずこう折ります、お山ね」

子ども 「どう?」「こう?」「こう?」

先生 「おしゃべりをしている人はわかりませ

ん、○○ちゃん!!」「次はこうです。みん

なこうなったかな」

子ども 「こう?」「どう?」……略

この活動で教師は子どもにせみの折り方を教えているつもりであるが、子どもの側の実質体験は紙を折る以外に、教師の指示を待つ、指示に従う、確認を受ける、緊張する、不安を感じる、わからなくて困る、しかられる、などである。しかられたり、どやされたりしながら、子どもはなぜ、せみを折らなければならぬのだろうか。

三、何もしないで一日が終る子ども

自由選択活動は子どもが主体的にとりかかる活動であるから、教師の意図と子どもの実質体験との間にズレが生じるということは少ないはずである。しかし形だけ自由にした保育は一斉課題活動とは異なった意味でさまざまな問題を含んでいる。次の例は“職員室組”の子どもである。

朝からばら組のM夫、職員室に用事もないのいうろうとやって来る。年長組の体も大きいし、元気のよい子である。

M夫「園長先生何やってるの？」

園長「お仕事」

M夫「フーン」とそこらをうろうろする。

園長「M夫君はどんな遊びが好きなの」

M夫「ぼくはさ、ドッジボールとか、でもお部屋

には何にもしたいものがないんだよ」

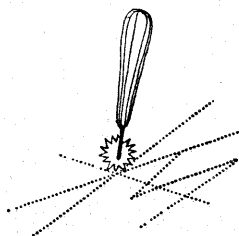
M夫のクラス担任は経験も十分ある中堅の教師である。悪い人ではないが、運動が嫌いで子どもがなつかず、クラスはいつまでたってもまとまらない。

子どもは勝手に家から怪獣けしごむなどを持って来て小グループでごそごと遊んでいる。教師は計画も立て、準備もするが、子どもの側からするとしたいものが見当らない。結局うろうろと稀薄な一日を過す。「何もしないで帰っていく子どもたち」が出てしまう。教師の側から見ると、先生の意図にそってくれない扱いにくい子どもとうつるかも知れないが、子どもの側から見ると「ああ、ばら組はいやだ

な、ぼくゆり組だとよかった、だってばら組はなんにもおもしろいことがないんだもの」ということになる。

四、むすび

五〇年代に入って保育は大きなカーブを切って方向を変えたが、末端の現場の混迷は深い。保育の問題は形態の問題ではなく、むしろ個々の子どもに成立する実質体験の質の問題である。子どもが心からたのしく満足できる充実した生活を経験させたいものである。



下^{した}

萌^{もえ}



▲シロバナタンポポの若芽

白い花を開くシロバナタンポポ。

九州は天草地方にのみ見られる変わった植物である。

めずらしさも手伝って、種子を採取し東京へ持ち帰って庭先にたねまきをする。

芽ばえた若芽は、東京で見られるタンポポやセイヨウタンポポとあまり変らないように見えるが、やがて白い花をつけ生れのちがいを示すことになるであろう。

文・写真 阿久澤栄太郎

年少讃歌

Sちゃんに

藤本 美穂子

新しい出会いがあつて、同じことのくりかえしの中で、あなたたちと私だけの時間が始まりました。

基本的には変えがたい幼稚園生活の中で、目にするもの、聞くもの、触れるもの、全てが初めてというあなたたちの新鮮な気持と同じものを、いつも持ち続けるのは、そうやさしいことではありません。

一年一年の時間の重みが増えれば加わる程、「あなたたちだけの時間」の保障はむづかしくなります。

私にとっての時間の重みは、あなたたちにとっては迷

惑なことであるにちがいありません。あなたたちと同じに瑞々しい感覚にはとても及びませんが、努力してあなたたちに近づくかなければならないと思っています。

*

私は五才児―一番年長の人達とのおつきあいが長く、三才児―一番年少のあなたたちとおつきあいは、年長の人の半分にも満たないのです。けれども短い数年で、私は年長の人たちから得たものより、多くのものを得た

ような気がします。

三才児、四才児は見る機会もなく、五才児にしか接することができなかった私が、初めて三才児に接した時の驚きは、この人たちも子どもだったんだろうかということにはじまります。

知らず知らずのうちに、五才児を通してのみ子どものイメージが出来上っており、三才児はその中に入りきれない、はみ出してしまふものだったのです。

言葉がほとんど通じない、心に届く方法がまるでわからない、私が今まで学んできたものは何だったのだろう。

貯えたつもりでいたものが、砂の城を波がさらひ跡形もなくなるように、ものの見事にくずれ去るのを覚えた時の衝撃。

私は三才児と接することによって、もう一度最初から子どもというものをとらえなおさなければならぬことを教わるのです。

三才児に出会うことがなくても、遅かれ早かれ必ずこ

の衝撃は味わったかも知れないと思います。今までわかったつもりでいたことがそれ程長く子どもたちに通用する筈がありませんから。けれども三才児を通してこのことに気づかされたのは、とても自然なことだったとうれしく思っています。

子どもってなんだろう、どんな存在なんだろう、子どもにどんな意味があるんだろう、そして子どもを教育するというのはどういうことなんだろう、教育ってなんだろう、というぐあいに、仕事をする中で明らかにしていかなければならないことが、具体的に見え出したのですから。

*

私が、三才児が五才児のイメージからはみだしてしまふと感じたことというのは、子どもたちがひとりひとり何とちがうことか、子どもたちは何と多様な反応をすることかという、ごくあたりまえのことについてなのです。私にはこのあたりまえのことが本当にはわかってい

なかったし、見えていませんでした。

子どもたちは、たしかに私の言葉や動きに対して多く反応するわけですが、その反応のしかたがひとりひとりがうのです。子どもは、自分をとりまいている全てのものの影響をうけながら、幼稚園の環境、友達、先生に反応します。

子どもをとりまいている全てが、ひとりひとりちがうのです。もちろん同年齢であるとか地域が同じとかというごくわずかの共通点がありますが、ひとりひとりちがうのです。それが見え出した時、私はどのように対処したらいいのかわからなくなってしまいました。

私は、子どもたちに教わる以外に方法はないと思っています。

*

*

Sちゃん、あなたは四人兄弟の三番目、六才のお兄ちゃん、四才のお姉ちゃん、三才のあなた、一才の妹。

お姉ちゃんも昨年、三才のひよこ組にいましたが今は年中組にいます。そしてあなたが今度ひよこ組に入ってきました。

お母さんが入園直前までおしめがとれないことを気にしていらいしゃいました。あなたは三月生れ、四月生れの人とは同年齢でも一年のひらきがあります。体格も一番きしゃでしたから、気づかわれるのも無理のないことだと思いました。

あなたはお姉ちゃんと一緒に登園してきました。私と子どもたちの間の糸が混線している時には、あなたはどんな意味においても目につく存在ではありませんでした。

そして一通りの園生活がわかり、もの珍らしさが失くなってくると、あらためて、お母さんがいないということ、自分を中心にしてなりたっていない世界があるということなどに、気づき、子どもたちは性格や気質によって、あらわし方は様々ですが、不安を感じはじめます。Sちゃん、あなたは幼稚園に来るのがおっくうになります。

した。

幼稚園に来て、声を出さない、話さない、椅子に座って動かない、お姉ちゃんと一緒にいられる間はくっついてはなれない、という状態が子どもたちの目にも少しちがうと見えはじめました。

私にとって救いだったのは「いや」と「いい」が首の動きではっきりわかることと、絵本やおはなしをする時には、声をかけなくても見えるところに動き、とてもよく聞いていたことです。

あなたがいつもどこにいるかということには気を配りましたが、自分の部屋に居ることを強いることはしませんでした。

お姉ちゃんと一緒にいらなくなるとあなたは自分の部屋のあなたの椅子に腰かけてほとんど動くことがありませんでした。

そんなあなたに私はよく声をかけました。

「こんなことやってみない？」

「入ってみない？」「こない？」

でもいつも「いやだったらやりたくなるまでやらなくてもいいのよ」という言外の気持を大切にしながら。

あなたは入ってきませんでした。毎日のささやかなおやつでさえも、両手を後にくんで首を横にふるのです。お誕生会の特別おやつでさえも、手をつけようとしませんでした。

Sちゃん、みんなの中に溶けこんでいけない時に、みんなの視線の中で——見つめられているいけないには関係なく——物を食べるということとはたやすくできることはありませんね。ある時、私は後に手をかくすあなたに、「小さくわってあげようか？」と声をかけてみました。割っていただくほどのおやつではなく、そうすれば姿を止めがたくなるようなものなのですが、それでもあなたは首をたてにふってくれました。

あなたを見ていて、私はいくつかのことに気づかされます。

床に腰をおろすという何気ない動作も、緊張している時にはとてもむづかしいことなのだということ。

空箱などを使って好きなものを自由に作る事が子どもたちは好きです。ダンボール箱を利用した材料入れを手に取りやすいように床に並べておきますと、子どもたちは、しゃがみこんでつくります。いろいろなおもちゃで遊ぶのもたいへん床を使いますから、子どもたちが床にしゃがむそのことに今まで注意して見たことがありますませんでした。

あなたは、このしゃがむという姿勢がとれるまでの心の動きを、スローモーションフィルムがまわるように見せてくれました。

このことからごく自然にしゃがんでいるように見える行動にも、自分にとって乗り越えなければならぬ壁を経験する子どもがいるということ。もしかすると、どの子どもたちも幼稚園の床に初めてしゃがむ時には、瞬間ではあるにしても、あることを乗りこえるのかもしれないというふうに思えてきます。

そしてこれに似た葛藤はあらゆる場面であるにちがいないと。

また、私が差し出す手をあなたは素直に受け入れてはくれませんでした。

私と手をつなぐことをたいへんみんなが喜びますから、あなたが不安に思っている時、手をつなぐことでいく分か楽になるのではないか、手をつなぐことによってあなたに近づける緒になりはしないかというさもししい願いや期待をこめて手を差し出したにちがいません。あなたは手をひっこめた、じゃんけんにはなかったのは、あなたの私への配慮だったのかもしれませんが。

*

たった一枚の絵を描き、自分にできる確実なことだけ参加し、ほとんど話すことなく、水あそびは見学で通し、箱製作では驚くほどの手際の上さと根気の上さで楽しいものをつくりで一学期を終え、二学期をむかえました。

運動会を数日後にひかえたある日、私はお母さんに「もしかしたら、当日雰囲気は圧倒されていくつかの競

技に出ないで座っていることがあるかもしれませんが、とがめることはおっしゃらないでください、前もって注意なさることもないように」といった意味のことを伝えました。当日あなたは、気おくれすることもなく全部の種目に参加できました。その頃から門を駆足で入ってくる姿を見ることができました。

秋の終りの参観日に、私はあなたたちと、四月からぼつぼつに遊びながらつくってきた、「魔法使いのおばさん」の劇あそびを観ていただきました。

悪いおばあさんといいいおばあさんがいます。二人はそれぞれ雲の上に住んでいて、ほうきに乗ってひよこ組にやってきます。悪いおばあさんは、子どもをつかまえて食べてしまいたいと思っています。子どもたちのわすれものはみんなとっていつてしまいい、子どもたちを困らせます。いいいおばあさんは子どもが大好きで、雲のおふろに連れていつてくれたり、雲でお菓子を作つてくれたり、悪いおばあさんがとつていったものをそつと取りに行つてくれたりします。悪いおばあさんがいやがること

を教えてください、栗のいがやこわいお面でびっくりさせたこともあります。

そしてこの日、

いいいおばあさんは雲の遊園地を作りました。いつも空をとぶ時は、おばあさんのほうきに乗っていました、この日は小さなほうきをみんなに一本ずつ作ってくれました。小さなボタンがついていて、それで自分が操作するのです。遊園地についたとたん悪いおばあさんに見つかり子ども達は雲の中にかくれます。が、ほうきを持つていかれてしまいます。いいいおばあさんの協力でほうきをとりかえし、遊園地のジェットコースターやコーヒーカップにのつてあそんでかえつてきた、というおはなしです。

これを観てあなたのお母さんは小さなメモを下さいました。

「もうすっかり溶けこんでいるのがよくわかります。目がちがいます。椅子には座っているけれど心はとても動いています。もうちょっとからだがふと動き出すまでに

は」

二学期のおわりの小さなクリスマスの集いでは、あなたはみんなと楽しんでいました。お母さんへのプレゼントも、ペンダントやエプロンやポシエットをとめていて、ねいにきれいに作ってあげました。合奏もフォークダンスも楽しんでいましたね。

＊

あなたが望んでやり出すまでには十ヶ月近くの時間が必要でした。私はいつも、こんなやり方でいいのだろうかと思わないですごした日はありません。しかし私はいつもこのように考えていました。

「やりなさい」「やるのです」と上から決めてかかるのは手輕で、受ける方もその方が楽だということがありません。けれどもそれでは自分の選択の余地がありません。自分の人生を自分が生きるためには、自分の責任において、自分で選びとることがなければなりません。私は、Sちゃんが一つ一つ自分の責任において選ぶ

ということを、何よりも大切なことだと考えていたのです。

「やってみない？」決めるのはSちゃん、あなたです。「したくない」「やってみようか」どちらかです。次の時又選択をせまられます。決めるのはSちゃん、あなたです。判断することが、あなたを越えるものなら、それは無理なことです。あなたにとって一番身近なこと、あなた自信に関わることですからあなたに選択を求めることは、きびしいことではあっても無理なことではないと考えます。私はいつも待っていました。いつかあなたの心が動き出すその時の来るのを、疑わないで。

＊

あなたの仲間たちは「お椅子はなぜあるの、おはなしをきく時、なぜお椅子に座らなきゃならないの、立って聞いたっていいでしょ、聞きたくない時だってあるんだよ、出たい時お部屋から出るのはいけないの」とからだで私に問いかけてきます。

先生という私にとって都合がいいというだけで椅子に座らせるのではないのだろうか。私にとってやりやすいということだけでためらいもなく当然のこととしておしつけていることがないのだろうか。

それが教育という名のもとになされていることがありはしないだろうか。

あなたたちは、私の力にあまるきびしい問題を次々につきつけてくれます。

仕事を始めた当初、私でも真剣に二十年もし続けるなら、少しの自信は持てるのだろうかと秘かに夢見たものです。

二十年越えてしまった今、自信はおろか、もうこれ以上は見たくないと自らの目を閉ざし、闇の中を杖をたよりに平安を求めてさまよい歩くオイディプスの姿がうかびます。不安であぶなっかしげな姿を感じています。秘かに夢見た姿と何とへただりのあることでしょう。

けれども私はこう考えて慰めています。

苦しい間はともかく、苦しくなくなったら仕事をする

のはよそうと。

苦しいと感じられることが、まだしも私にのこっている誠実さかもしれないから。

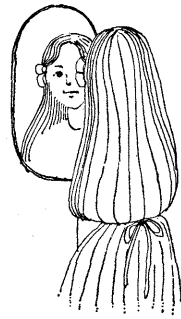
そしてそれが失くなることは、子どもの前に立つ最小限の資格を失なったことになるのだと。

(大阪・長居幼稚園)



私の保育

——春に想うこと——



江口 明子

子どもたちは、すでに春を感じ始めている。手や足をぐうんと伸ばして、そう、心の中で眠っていたものを発散させるかのように、園庭にとび出していく。

いつも友だちの後をくっついてばかりいるN男が、頬を紅潮させて私を呼びにきた。

「先生、きてよ。早く。」

「どうしたの？」

「いいからきてよ。早く、早く。」

N男に呼ばれたことがうれしかった。彼の迫力に圧倒され、また、わくわくしながらついていった。

N男は、水仙の芽を指さしていた。細長い花壇に、水仙の芽が三つほど出ていたのだ。

N男は、うれしくてしかたがないかのように、かがみこんで水仙の芽を見ている。

「先生、冬と春とがかわりばんこしたよ、冬が土の中に入って、かわりに春が『次はぼくの番だよ』って出てき

「たんだね。」

ぱっと顔をあげたN男がまぶしかった。

ああ、もう一年が過ぎ去ってしまった……。何と表現したらよいのだろう。もの悲しいような、それでいてうれしいような、複雑な想いがこみあげてくる。

春を迎えて……年中組三十四名の担任になってからの一年が脳裏に甦ってくる。

元気に遊んでいる、あの子どもたちの姿に一年前の姿をダブらせながら……。

K男はいばった顔で、友だちに何やら命令している。初めての集団生活になじめなくて泣いてばかりいた。大きな体を小さくして、私の背後に隠れるようにしていたK男が印象に残っている。

M子は砂遊びをいやがった。砂をさわるのがきらいだった、友だちに誘われてしかたなく砂いじりをしたときも、まるで汚ないものをつまむようなしぐさで砂をつかんだ。

今、M子は砂山にトンネルをほり、じょうろで水を流している。登園してすぐに砂場へ出てからずっと……。夢中になって遊んでいる。砂と水と太陽と子ども……。特別相性が良いと思う。

Y男は相変わらず荒っぽい。が本当はとてもやさしいのだ。てれやだから、つい反対の行動をとってしまう。仲良しのKをかばおうとして、Sの作った剣を折ってしまい、みんなに叱難されたときはかわいそうだった。Sの剣を折ったことはいけないことだけれど、Kのために必死になったY男がいじらしかった。

Aが友だちに呼ばれてふり返ったとき、机上のクレヨンが床に落ちてしまった。ふと横を通ったSが、クレヨンを一本ずつ拾い上げ始めた。AはSとほとんど話をしたことがなかったので、しばらくぼかんとしていたが、Sが最後のクレヨンを拾ったとき、

「ありがと。」

とそっと言った。

ささいなできごとではあるけれども、何気なくクレヨ

ンを拾ってあげたSのやさしさや、感謝の気持ちをはっきり相手に伝えたAの行動は、けっして見のがせない、貴重なものだと思う。

いつも後になつてはつとするのだが、貴重な場面を見のがさずきたらどうか。はなはだあやしい。全身を目、耳にして、子どもたち一人一人に接したいと思いつつ、その難しさに毎日悩まされる。

I子にしても、ひざの上で本を読んであげるまで、こんなに甘えたがり、安定したがつているとは思わなかった。しっかりした口調で話し、てきばきと行動するI子……彼女の一面しか見ていなかったことに驚き、反省させられたのである。

Tとはうまくかかわれなかった。どのように接したらよいのかわからず、迷った。友だちができず、私ともしっくりいかなくて、Tはさびしかったと思う。粗暴やいたずらをしかつてしまつてから後悔をくり返した私だった。彼のさびしさをわかつてあげずに、彼の行動だけを見ていたような気がする。

ある日、ドアを閉めようとして、Tは自分の指をはさんでしまった。保育室が割れんばかりの声でTは泣いた。私はTが泣くのを初めて見た。みんなもびっくりしてTを見つめていた、すると、Tは私を即座にさがして、私に抱きついて泣きじゃくつた。何も難しいことではないのだ。Tをこんなふうに抱きあげることがどうしてできなかったのだろう。

人間がかかわり合うということは、理くつではなく、ことは超えたものだ、とそのとき思った。確かに、理くつや秩序やことは必要である。現に人間の結びつきを強くしてくれる、が、それだけでは成り立たない。

S子には本当に悩まされた。三学期の最後になって、登園拒否が続いた。家庭の事情も原因の一つになっていたかと思われるが、毎朝、きょうはきてくれるかしらと待っているのはつらかった。きょうはだめかな、と思っていると、十分ほど遅刻してS子がくる。そしてやや明るい表情で降園したな、と思つて喜んでいると、次の日の朝は玄関で大泣きしているのだ。

やっと泣かずに登園し、友だちの中に入って、大好きなままごと遊びをし始めたな、また、なわとびにも意欲がでてきたな、と思ったら春休み……。新学期はどうかしら、心配は消えない。

一月に妹ができたE子はどうしているかな、妹が産まれる前は、姉になることを喜んでいたE子だったのに、産まれてからは、赤ちゃんのようになってしまった。園でも、私から離れない時期があった。私の身体のどこかにつかまっていけないと不安のようだった。小柄なわりに体重が重いE子をおぶって、保育室と園庭を往復したっけ。

春休みに、うんと甘えて、また元気なE子になってほしいな。

一人一人について書いていったら、いつ終わるかわからなくなりそうである。クラス全体を見て「このクラスはこんなクラスである」と一言ではいえない。他のクラス先生から、しな感じのクラスという表現で言ってい

ただくことはあっても、私にとって大切なのは一人一人であって、クラス一まとまりをことばで表わすことは難しすぎる。

ただ、特に思うことは、クラスの子どもたちはみな動物が大変好きで、動物を主人公にした遊びをよくしていたことだ。

たとえば、ペンギンのぬいぐるみを中心にしたごっこ遊びは、ほとんど全員が経験したのではないだろうか。

朝登園したら、ペンギンのとり合いである。ペンギンのぬいぐるみを持つことができなかったもので、ティッシュ入れのペンギンで遊んでいた子どもたちも多かった、ぬいぐるみは悲惨である。手がとれたり、口ばしがはつれてきたり、足がはずれたり。

手あかがついて真黒になったペンギンをおふろに入りたいというので、お湯を洗面器に入れ、石けんとスポンジを用意した。

大喜びでペンギンをきれいに洗ったのはよいのだが、中のわたが水分をすって、ペンギンのお腹がふくらんで

しまった。

タオルでふいてかわかしたが、ペンちゃんの肥満は今までに続いている。首も短くなり、安定が悪いので立つのもやっとだ。様変わりしたペンちゃんを、子どもたちは相も変わらずかわいがっている。降園の前には、ままごとのふとんを敷き、ペンちゃんを寝かしてから帰ることが多い。

また、自分がペンギンになりきることもある。ダンボール箱に穴をあけ、首、手足を箱から出してヨチヨチ歩く。どの子どもも、ペンギンになっているときは楽しそうだ。

Nは、絵をかくことを好まなかった。ほとんど自由画を描かない。手先は器用なのだが描くことに自信がないらしい。自分が思っているものを描けないことが、絵から遠ざかってしまう原因のようだ。

それが、ある日横向きペンギンを初めてかいた。大きな画用紙に豆つぶのように小さなペンギンだったが、とてもかわいらしく愛敬がある。彼自身、満足いくもの

だったらしく、目をキラキラさせて私に見せにきた。

「もっと大きくかいたらいいのに。」

ということばをあわててのみこんで、私は、

「わっ、かわいいペンちゃん。」

と言った。彼は

「ぼくのペンちゃんだよ。」

とうれしそうに言い、友だちに見せて回った。

与えられたものではなく、本当に好きなものなら、子どもは自然に描こうとするのではないだろうか。

春をむかえて、過ぎ去った一年をふり返りながら思いつくまに書いてしまった。

毎日毎日がとても重いものだとつくづく思う。子どもの成長力はすばらしいものだ。

ぼんやりしているひまはない。私がぼうつとしている間に、彼らはどんどん伸びていってしまうからだ。

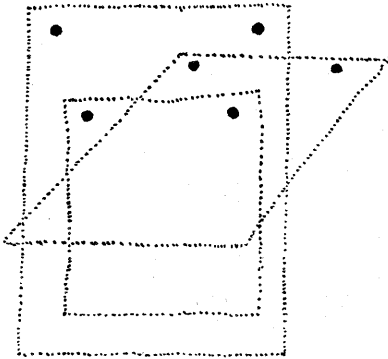
失敗しては後悔し、反省する。そしてまた期待と不安の入り混じった明日をむかえようとする。これでよいの

かと常に疑問をいだきながら、本音でぶつかっていかねばならない。

保育とはなんと難しいものなのだろう。と言いつつも、私の心は、新しい春をむかえて、また子どもたちと共にする生活を楽しみにしている。

子どもたちは、すでに春を感じ始めている。手や足をぐうんと伸ばして、そう、心の中で眠っているものを発散させるかのように……。

(東京・大和郷幼稚園)



韓国幼稚園教育 (三)

戦後の動向

李 相 琴

1 独立と動乱

一九四五年、第二次世界大戦後独立した韓国はしばらくアメリカの軍政下にはいることになった。すべての面で興奮と混乱状況を免じえない時代であったが、当時、韓国の教育界が当面したもっとも困難な事情は各級学校の教育内容を日本語から韓国語に変えることであった。

国語による新しい教科書の編制が最大の役事になり、段階別教育の内容について検討が重ねられ、多くの関係者が動員された。

こういう中で、文字を教えない幼稚園は、比較的安定していたし、また、戦前も幼稚園では日本語常用がそれほどきびしく取りしまられてもいなかったので各園の都合により、各自が再開園されていった。これはまたある意味では、幼稚園が教育当局者の関心外事になる契機になったかもしれない。

アメリカ軍政がもたらした教育制度の大変革は六・三制であった。韓国の幼児教育指導者たちは、アメリカの小学校の最低学年または初級段階としての公立幼稚園制度の導入をはかった。一九四八年から独立韓国政府

により教育行政が施行されるようになって幼稚園が学校教育体系の最初の段階として、公教育制度化される構想がねられた。一九五〇年政府は幼稚園義務教育案の成立を発表するにいたった。しかし、その直後、朝鮮動乱がおこりこの案は水の泡と消えさり二度と公論される機会とはなかった。

戦時下の避難首都釜山では到るところに孤児院が設立され正常な幼稚園をひらくことは思いも及ばぬことであった。当時、小学生は公園や公設運動場のあちこちで青空教室の授業をうけ、大学生たちは釜山府民館という劇場にあつまって戦時連合大学の共同講義をうけた。

梨花女子大学校は釜山の山の手に天幕を張り、板でかこった仮校舎で学生たちは地べたにすわって講義をきく避難教育時代に入った。この時、師範大学附属の梨花幼稚園は特別条件で開園した。園庭までは無理であったが窓ガラスもちゃんとほめこまれ、りっぱな板敷きの床がありピアノや遊具がとりそろえられた幼稚園が新築された。これは、全校で一ばん豪華な建物になった。ご殿の

ようなこの幼稚園で嬉々として遊びにふける幼児をみることは、戦火の不安で傷ついた当時の学生、教職員そのほかすべての大人たちに大きなぐさめとはげましであった。

一九五三年休戦が成立し避難時代は終わったが全国土は焦土化された。もちろん学校も焼失したり破壊された。

以後、教育政策はまず義務教育機関の再建に全力投入し、次いで中等教育機関の整備にとりかかったのだが、多くの財源と長い期間を要した。したがって幼稚園は政策の保護を全くうけられない状態で私的に発展するよりほかなかった。一九七〇年代半ばまで韓国に公立幼稚園が一ヶ所もなかったのは戦争の余波が一つの原因になったといえる。

幼稚園自体の発展には、何らのぞましいきざしがみえなかったこの時代に、教師教育制度は確実な質的地位を固めた。戦前、二年課程の教育学校、後に三年課程の専門学校レベルまで高められた幼稚園教師養成は、独立後、正規四年制大学の師範大学で養成される制度が成立

した。もちろんすべての幼稚園教師が四年制大学をでるのではなく二年制初級大学制度と併行することにはなっているが、学士幼稚園教師の出現は幼稚園教育の質的向上をはかる重要な意義をもつものである。

戦前、梨花保育学校、中央保育学校、京城保育学校、崇義保育学校の四校が教師養成を専担していたが京城保育学校は、一九四三年に廃校し崇義保育学校は北鮮地域になったので残る梨花と中央がそれぞれ大学課程に昇格した。中央保育学校はその間、保育科を母体にして着実に高等教育機関の基盤を固め終戦後、男女共学の総合大学校として認可を得、保育科は師範大学の一学科に編制された。その後、幼児教育学科と改名し現在に到っている。梨花保育学校はもともと専門学校の一学科として運営されていたので学校全体が総合大学校として出発するとき四年制に編制された。現在師範大学の教育学科学令前教育専攻になっている。いうまでもなく両校の卒業生は幼稚園教育界の指導的役割をはたし、最近の幼児教育ブームに際して献身と活躍をつづけている。

2 幼稚園乱立と受験塾化

動乱後、国民学校（小学校）の再建は思うようにはかどらず、あの悪名高いモヤシ教室（過密教室、日本ではスシ詰か）を運営せざるを得なくなった。それどころか二部制授業がさけられず都市の人口過密地域では一時四部制授業もあった。

一九五五年、韓国最初の私立国民学校が梨花女子大学校師範大学の教生実習及び研究機関として附設された。これに次いで別に実習も研究も目的でないただ公立国民学校の悪条件にたまりかねて私立国民学校が開設されはじめた。当時の教育政策としては、すこしでも義務教育問題解決のたしになると思って積極的に奨励したほどだ。とりそろった教育的環境にベテランの教師が配置された私立国民学校はそのまま中学校入学試験の成績に反映されることになる。日本のようにエスカレータ制度はなくても各私立国民学校は入学希望者が門前門市をなしすべての志願者を受け入れられなくなった、それで発展

したのが入学試験である。

このような実状にあおりたてられたのがまた私立幼稚園であった。メンタルテストの練習、返事とあいさつの訓練など本来の幼児教育よりも私立国民学校の入学生数に関心がかたよっていった。

いっぽう、一九六〇年代に入ってT V放送が開始されるや幼稚園々児の番組はまた別の話題をうんだ。合唱、合奏、児童劇等に出演するため幼稚園は特技訓練に熱を入れた。画面にたびたび出演する幼稚園ほど人気があがり入園志望者が押しよせる傾向もでてきた。はじめのうちは放送局が幼稚園に出演依頼をしていたが、だんだん幼稚園側から出演機会を交渉する奇現象まででてきた。出演幼児の衣裳費やそのほかの経費は父兄負担だったので、それだけでなくも高い教育費に出費が重なるので父兄もたいへんであった。

一九六〇年代は幼稚園の数がまだ少なく就園率が3%未満で幼稚園教育は特殊階級家庭の特権と認識される傾向があったので、入学準備や技芸訓練などに熱中する幼

稚園が、一般社会から白眼視されるようになった。もちろんこの現象は極く一部の幼稚園にあらわれたものであったが、批判の声は針小棒大にふりかかってきた。新聞の論説にまで幼稚園無用論がかきたてられた。

六〇年代後半に入って私立国民学校の選抜はちゅうせんになりT V出演は禁止された。こういう解決策のよしあしは別として一時の熱病はようやくしずまった。

たまたま世界の幼児教育界では新しい幼児教育運動がもりあがっているとき、韓国の時代錯誤的な一部幼稚園が、教育問題対象になったことは遺憾というよりほかない。しかし、六〇年代はまた着実な発展をもたらしした時期でもあった。一九六八年、幼稚園規定が制定され、幼稚園教育課程及び幼稚園施設基準令が公布された。幼稚園教育課程設定は、独立後ではじめてのことで第一次となる。かたわら、一九六一年に児童福利法が制定され、託児所運営の指針となったが、一九六八年には「未認可託児施設臨時措置要令」が公布され、託児所の整備が行なわれた。この時、託児所は子供の家と命名された。その

数も幼稚園とほぼ同数の五百カ所内外で、六〇年代から七〇年代にかけて韓国幼児教育の一役を果たしたのである。

3 七〇年代の動き

まず、海外の情報に目と耳を開けている大学教授側から幼児教育活性化の胎動がありはじめた。長い沈滞期と無政策主義にあせりを感じたのである。七二年か七三年頃、民営研究所の「行動科学研究所」が「幼児教育セミナー」を開催した。参加者は大学教授レベルで幼児教育、心理学、教育学、児童学などの学科へ所属している人たちだった。世界的な早期教育ブームにそくして幼児教育の意味を確認する集会であった。そこで幼児期の重要性、幼児教育の意義、早期教育との違いなどが挙論された。そのとき、ある著名な教授が幼稚園教育否定論を主張した。幼児期が重要であればこそ、家庭で自由に遊ばせばいいのであって、幼稚園にいかせて拘束することはないという論旨だったと記憶している。懐疑論者もい

た。でも大勢は現状のままではいけないというような結論になった。

私たち幼児教育関係の教授たちは話す機会、書く機会があるごとに幼児教育の必然性を強調した。

一九七五年、幼児教育学会が創立された。研究会を重ね、研究誌を発行し、活発な研究活動が展開され、二年後には韓国教育学会の分科研究会になり、現在に及んでいる。会員も年々増加している。学会とは別に教師達の組織は、以前から意欲的な活動をみせている。代表的なのは韓国オリニ（子ども）教育協会、これは Association for Childhood Education International の韓国支部で、一九四八年以来もっとも多くの業績をつんでいる。大韓教育聯合会の「幼稚園教育研究部」は、全国規模で会員数が多く、現職再教育プログラムを続けている。そのほか韓国幼児教育協会、キリスト教幼児教育協会などがある。これらの教員組織がそれぞれ月例研究会、夏休み冬休みを利用した講習会や研修会をひっきりなしに開催し、七〇年代の幼児教育ブームはもりあがっ

ていった。韓国の公立幼稚園は七六年に設立された。ソウルに四カ所、釜山に一カ所の五園が示範的に開園された。この七六年をきっかけに、公立幼稚園は急速に増加され、八〇年代には私立を上廻ることになる。特記することはソウル特別市教育委員会が、史上初めて幼児教育専門家を同委員会奨学士として配置したことである。のち一九八二年には、文教部にも幼児教育担当部署が設けられるに到った。

七〇年代後半期の幼稚園教育の急進展ぶりは研究活動にも拍車をかけた。四年制教師教育機関は前述した梨花女子大学と中央大学の外に徳成女子大学、誠信女子大学、また師範大学ではないが、延吉大学の児童学科、淑明女子大学の児童福祉科学が、それぞれの附属幼稚園や幼児園で、本格的な研究にとりくみはじめた。特に多様な幼児教育プログラム開発の要請にこたえるため、各大学は独自の研究をすすめている。例を上げれば梨花では生活中心プログラム、中央は創意性開発プログラム、徳成はモンテソリ法、延世はオープンシステムなどであ

る。梨花では公立幼稚園増加にともなう新しいタイプのプログラムを開発するため附属国民学校の一室をかりて中程度以下社会階層家庭の幼児に実験的な教育を一年間実施したあと、ソウル市内の庶民アパート地区公立幼稚園で適用する研究も行った。このプログラムの特性は両親教育を併行する点にあり、特に母親のボランティア活動を含み家庭との積極的な関連を試図したことにある。

七九年には、幼児教育課程の改正があり、第二次幼稚園教育課程が発令された。第一次教育課程が日本と同じような生活領域区分で健康、社会、自然、言語、創意的活動（音楽リズム・絵画製作包含）であったが、第二次教育課程では基準を全然異にしている。すなわち生活領域ではなく発達領域に変わった。したがって表現は同じ語句であっても、ねらいが違ってくるわけだ。身体、社会、言語、認知、創意性の各項目をみると、例えば言語は言語発達を意味するものであり、社会は社会的発達を意味する。発達基準になると、当然の結果として個々の幼児の発達に応じた教育でなければならないということにな

る。従来の教育課程では、ややもすると領域別に生活を区切り、言語の時間、自然の時間、体操は健康の時間として運営しがちであった。しかし、発達領域になると一つの活動にいろんなねらいが重なってくる。ままごと遊びをしても社会発達面、言語発達面、創意性発達面などの総合的な指導を伴うという解釈になる。この起源はより心理学的な基準で幼児教育を展望するところにある。

4 跳躍の八十年代

さて、八十年代は韓国幼児教育の最高に華やかな時期であり、これからますますその度を加えることになるであろう。

これまで幼児教育または委託機関は多様に管理されてきた。すなわち幼稚園Ⅱ文教部、子どもの家Ⅱ保健社会部、農繁期託児所Ⅱ農村振興庁、セマウル(新しい村造り)協同幼稚園Ⅱ内務部というようなかたちである。それを一九八一年、内務部のセマウル幼稚園に統合した。名称は従来のところから「協同」という語を削除したも

のだ。一九八二年年末に「幼児教育振興法」が国会に提出され、一九八三年六月、大統領令として公布された。

これによると幼児教育機関は、文教部の幼稚園と、内務部のセマウル幼稚園の二種類にしばらく、形の上では二元化体制で運営されることになっている。専門家や関係者たちは、日本の幼保関係が固疾化している例を参考に、一元化を提案したが、日本の場合とは事情が違い本軌道にのるまで内務部が管理し、終極的には文教部に帰結することが前提になっているとのことであった。

とにかく公立幼稚園の増設と、セマウル幼稚園の新設によって幼児の教育機会が、各階層にひろがり就園率は高まっている。

その間、韓国の幼稚園教育は私立幼稚園に依存したものであったが一九八一年を期して、公立と私立の比が転倒することになった。就園率はいまだに低率ではあるが、一九八六年に第五次経済社会開発五カ年計画が終了するまでには、四〇％に上昇する予定である。また九〇年代には幼稚園の公教育化、義務教育化も予想されてい

年度別幼児教育機関現況(1982年現在)

年度 機関	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982
公立幼稚園	1	1	1	—	—	5	5	8	26	40	1,922	2,333
私立幼稚園	511	530	547	588	611	630	660	713	768	861	1,036	1,312
子どもの家	464	482	516	564	591	607	607	606	611	657	706	1,606 (統合)
セマウル 協同幼児園	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	203	
計	976	1,013	1,064	1,152	1,202	1,242	1,272	1,327	1,405	1,558	3,867	5,251

幼児教育機関現況(1982年現在)

区 分		幼 稚 園 数	園 児 数	就 園 率
幼 稚 園	公 立	2,333	85,093	
	私 立	1,312	90,453	
	計	3,645	175,546	
セマウル 幼 児 園		1,606	125,100	8.1%
合 計		5,251	300,646	19.5%

る。
園児の増加にともなって、教師養成も着実に増員されている。前記四年制大学に加えて、国立大学にも幼児教育科が設置されつつある。全国九個国立大学のうち、釜山国立大学と全南国立大学に、すでに独立した幼児教育学科がある。また近年、初等教育養成機関であった教育学が、二年制度から四年制度に準次昇格しつつあり、そこにも幼児教育専攻をおくとの計画もある。これは日本の学芸大学にいたものになるであろう。日本の短期大学にあたる二年制の専門大学で養成される卒業生が大部分、教師の需給に應じることになる。現在二年制四年制あわせて有資格教師は年間四千名にのぼる。
公立幼稚園と私立幼稚園の差は施設・設備と着実な教育内容にあるという。公

立でも、無償ではないので保育料をだすが、私立に比べればはるかにやすい。大部分の私立幼稚園は都市に集中しているので、いまのところ公立幼稚園設置は都市地域は保留されている。というのは、保育料のやすい公立に園児がかたよると私立幼稚園が打撃をうけるので、その保護策として抑制している。しかしセマウル幼稚園は都市の要救済地区には設置している。

幼稚園とセマウル幼稚園のちがいは管理が、内務部と文教部というだけでなく、運営のしかたにも差がある。

幼稚園は公私立とも保育時間が、大体3時間から4時間ということになっているが、セマウル幼稚園は7時間から8時間にいたるところもある。セマウル幼稚園は、在園児の20%は無償で、その他の幼児もおやつ程度の負担しかない。セマウル幼稚園の様相はひじょうに多様で、敬老堂や公会堂または役場の会教室などを利用する場合もあるが、りっぱな建物を新築し、ゆきとどいた設備のあるところも多く、たまたま同地域の幼稚園より設備がいいので、幼稚園々児が幼稚園に移りたがることも

ある。セマウル幼稚園はセマウル運動（新しい村造り運動）の一環なので、地域有志の協力が大きいと、いろんな面で幼稚園運営がゆたかになる。

セマウル幼稚園の教育内容は、文教部が作成したものを参考にしており、現職教育も文教部が委託するなど緊密な互助関係にある。日本の幼保関係とは全く違う。

各幼児教育機関の教育内容を実例から見ると、次のようなかたちになる。

例一、公立幼稚園

9 .. 20	登園
9 .. 20 — 10 .. 00	自由遊び
10 .. 00 — 10 .. 10	お手洗い
10 .. 20 — 10 .. 40	うた・リズム
10 .. 40 — 11 .. 00	おはなし
11 .. 00 — 11 .. 55	作業
12 .. 00	帰宅

例二、私立幼稚園

9 .. 00	登園
9 .. 00 — 9 .. 50	自由遊び
9 .. 50 — 10 .. 00	整理整頓
10 .. 00 — 10 .. 20	リズム
10 .. 20 — 10 .. 50	おはなし
10 .. 50 — 11 .. 10	おやつ
11 .. 10 — 11 .. 55	製作・作業
12 .. 00	帰宅
例三、セマウル幼稚園	
8 .. 00	登園
8 .. 00 — 10 .. 00	自由遊び
10 .. 00 — 10 .. 15	整頓
10 .. 15 — 10 .. 35	談話
10 .. 35 — 10 .. 50	童話
10 .. 50 — 11 .. 05	おやつ
11 .. 05 — 11 .. 50	自由遊び
11 .. 30 — 12 .. 00	ゲーム・リズム

12 .. 00 — 13 .. 00	おべんとう
13 .. 00 — 13 .. 30	おはなし
13 .. 30 — 14 .. 30	昼寝
14 .. 30 — 15 .. 00	総整理
15 .. 00	帰宅

これは、ふつうの機関での一例であるが、比較的教師
 とのおはなしや童話など静的な時間が多いのがめだつ。

これは教師担当幼児が、四〇名基準で多いのと、設備や
 資料の不足。また教師の資質にもよるものとおもわれ
 る。幼児の自由よりも教師の統制が多いという感じであ
 る。

ともかく、韓国の幼児教育が急速度に発達しつつある
 ことはのぞましいが、今一ばん憂慮するのは、量的な拡
 大と質的な充実の不均衡である。これは、韓国の幼児教
 育関係者がだれも認めていることだし、解決に尽力する
 ため協力をもとめてもいるので、よい方にむかうだろう
 と楽観的な期待で、みずから気やすめをするほかないと
 思う。

＝了＝（梨花女子大学校）

研究会に参加して

守 永 英 子

五十八年十月三十一日(月)、奈良女子大学文学部附属幼稚園の研究発表会。テーマは「遊びに熱中し、自発的に学習する子供を育てる」。

時節もよく、所も私の好きな古都、テーマも心ひかれるもので、私たちはいそいそと新幹線に乗り奈良に向いました。

学園前駅から数分の附属幼稚園の周囲は、大きな邸宅が並ぶ静かな住宅街、手入れの届いた庭木や生垣の緑が美しく、住んでいる人々の落ち着いた生活を思わせます。

附属幼稚園の門をはいると、敷地約二千四百坪という広々とした園庭が目の前に開け、庭の向う端には、敷地の高低を利用した長いすべり台がしつらえ

てあり、その周囲の斜面は芝生でしょうか、緑が広がっています。まず、明るい、整った環境に好印象を持ちました。

私たちが園についたときは、子どもたちの活動は始まっており、園庭にコースを作って自転車に乗っている姿がみられました。研究会の要項によれば、これは三年保育の四歳児のクラスだったようです。

三、四、五歳の各年齢が二学級ずつ、計六クラス約百六十名の子どもたちが、さまざまな活動を展開していました。二年保育の四歳児クラスと五歳児クラスが、バーババごっこにテーマをしぼっている外は四クラスとも「好きな遊びをしよう」というテーマで、三歳児では、お店やさんのしつらえがあったり、平均台やジャンピングなどで遠足ごっこの雰囲気がつくられている中で、子どもたちがのびのびと好きな遊びを楽しんでいるようでした。「バーババごっこにいまする物を作ろう」という四歳児の部屋と、いろいろなゲームを含むいくつかの遊びのコーナーでそれぞれにグループで遊んでいる五歳児の部

屋は、人垣の間から垣間見ました。細かいところまではゆっくり見られませんでした。が、それでも、子どもたちが落ち着いて自分の活動に没頭している雰囲気は感じ取れました。

このような研究会に参加する時の常ですが、クラスに腰を据えてじっくり見なければ、保育は深く見られない”という気持と、やはり”各年齢、各クラスの活動を全部見たい”という気持のはざまで揺れて、結局は後者を選んでしまうのです。

このほか、指揮者のもとに楽器で演奏しているグループがあったり、五歳児では、“バーバパパごっこ”の展開として、木で、子どもたちが出はいりできる程の大きい家を作る活動が行われ、子どもたちが板に釘を打ちつけていました。又、別なグループが平行して、箱舟づくりや、公園づくりをしていましたが、これも“バーバパパごっこ”の一連の活動のようです。

一時間の実際指導の間に、六クラスを見て歩き、しかも大勢の参会者の間から子どもの活動を見て保

育を云々することは、おこがましいことだと思いますが、園全体を包んでいるあの落ち着いた雰囲気は、研鑽を積んだ保育者の力と、行き届いた指導が子どもたちの生活の上に結実したものと云えそうです。そして、古いものを大切に今に伝える奈良という土地柄も、人の心を落ち着いたものにすることに役立っているのかもしれない。

今回の研究発表は、五十五年度から始まっている教育課程の改訂をめざした研究と実践の総括だったようです。発表会と同時に、“教育課程 3・4・5 歳児の年間指導計画”という立派な本も出版されました。実際指導のあとは、そこに至る精密な研究の発表と、大阪樟蔭女子大学の名倉啓太郎先生による講評、午後は、国立教育研究所の永野重史先生の、「幼児の自発性と教師の指導」という講演で、盛会でした。私どもも反省したり、刺激を受けたり……明日の保育に意欲を燃やしながら帰途につきました。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

『瓜姫』の昔話を

めぐって

上野 泰子

昔話とは、何百年もの歳月に耐えて、民衆の間で口伝えされてきた物語が、あらためてよばれるときの呼称だと思えます。ですから、どの物語も長い時の流れを経てはじめて、昔話たりえるのでしょう。ところが、優れた昔話の中には、その物語が生まれ出た瞬間から、その物語を昔話たらしめている力があると感ずることがあるのです。確かに、昔話は時代の推移とともに、語られる土地の移動とともに、様々な変化を試みてきましたし、

文字化の洗礼を受ければ、記録者の手によっても改ざんを加えられてきました。けれども、それらの外的要因によつては変わらない、変わらない故にますます輝いてくる核のようなものが、昔話にはあるのではないでしょうか。また、それらの核を中心に包みこんで口伝えしてゆく伝承の形態の内にも、自己の昔話らしさを保持してゆこうとする、すたれぬ力があるように思います。その力のことをA・アールネは昔話の「内的生命力」とよ

び、小沢俊夫は「形式意志の力」とよんでいます。

いま、ここにひとつの例として、『瓜姫』（もしくは『瓜子姫』）の昔話を取りあげてみたいと思います。この昔話は、東北から九州にいたるまで広く採話されており、『日本昔話集成』（関敬吾）には百余例が収められているようですから、それらの資料をもとにすれば、物語の基本的なモチーフはかなり明らかに抽出することができます。左の表の上段にモチーフ、下段にそれぞれのモチーフを効果的に盛りあげている、代表的な語り口を整理してみました。

1	婆が川で瓜を拾う。……	瓜の流れてくる音
	瓜から姫が生まれる。	“ドンブ、ドンブ” など
2	美しく成長して機を織る。	……機織りの美しい音 “じいさんサイがね、ばあさんクダがね、ギッコンバッタリコ”
3	爺婆の留守にアマノジ	

4	アマノジャク、姫に化けて機を織る。	……ヤクが来て、姫を襲い、木に縛りつける。
5	瓜姫の評判を聞いた殿様が妻にしようとして、アマノジャクが化けたものとしらず奥にのせてゆく。	……アマノジャクと姫の問答 “指一本はいるだけあけておくれ”
6	鳥の声で化けの皮がはがれる。	……人に似た鳥の声 “瓜姫ののりてゆくべき玉の輿アマノジャクこそいのてゆくらむ”
7	アマノジャクは殺され、その血でソバやカヤの茎が赤く染まる。	

これは、もとは西南の地方で多く採話された型のものですが、現在昔話絵本などに主に採用されているのはこの型だと思えます。他に変型として、瓜が畑からとれるもの、アマノジャクが山姥となっているものもあります。また、東北地方には、殿様が登場しないで、機の子の鳴き声から、あるいは瓜姫の食べる様子から異変を知って、爺婆が姫を救け出して終わる型や、姫が殺されてしまったて仇討ちとしてアマノジャクが殺される型のものが多いようです。

昔話に大変多いパターンは、何といっても異常な出生↓偉大な事業↓幸福な結婚ですから、先に表にした西南地方の型の方が、昔話として完成度が高いといえるかもしれません。ただ、このような表にしようと、例えば4のところでアマノジャクの機の子はどこに消えた、5の殿様が現れたとき、爺婆はどうした、とか気になって、物語としては殿様が現れないで終わるものの方が、よほどよくまとまっていると感じます。もっとも、これもあえて表化したからなのであって、語り聞かされてい

れば、「殿様が迎えに来たそのとき爺婆は…」などと説明されては、かえってうるさくて困ります。

語り聞かされていけば、殿様が出てこなくても、何かが欠落した感じは少しもしない、それなりに前半の部分がよく盛りあがって感じられる、殿様が出てくれば、それはそれで新たな発展となり、お話しに深みが増す、といったところだと思います。いずれの型にもそれぞれのポイントが認められ、その要所をいかにして印象的に盛りあげるかという点で、語り手の工夫がみられます。このように、昔話は語り手によって、どうしてもある要素が忘れられたり、付け加えられたり、置きかえられたりされがちなものですが、語りの流れの中では、それなりに形を整えられて、昔話の自然な形を保ちつつ伝えられてきたものだと思います。

では、ここで目を転じて、語りによってではなく、文字によって読まれたものの場合はどうでしょうか。

記録された瓜姫の物語で現在残っているものには、『嬉遊笑覧』巻九、お伽草子の絵巻「瓜姫物語」、柳亭種

彦の絵草子「昔話きちちゃん」とん」があります。中でも広く読まれた可能性がもっとも高いのは、やはり最後の、「修紫田舎源氏」という当時の大ベストセラー作家による絵草子だと思いますので、これを取りあげてみたいと思います。その序によると、種彦は、「越の国人に聞きしとて、むすめ豊が物語る童話三つ四つ」のひとつを、「きちちゃん」とんのおはなしせう」とつねにいうままに標題した、ということですが。もとの昔話よりかなり長いのですが、同様に表にしてみました。ただし、下段は補足としました。

1	武蔵国入間郡に正直夫婦、隣りに悪太郎	……それぞれの性格、生活描写。
2	正直かかが川で洗濯している	悪太郎のはやしことば
	と二つの香箱が……	“実のない香箱そっちへ行
	流れてくる。一つはか	け、実のある香箱こっち
	かに。一つは悪太郎に。	へ来い。”
3	悪太郎の箱から天の邪	

鬼かかの箱から機を織る小さき姫が出る。つくづくながめていると……	“きらちゃん”とほのかに機を織る音
すらすらと大きくなる	“我は呉羽 ^{くふは} というものなり”
4 呉羽姫、機を織り、夫婦に財を成させる。	対して天の邪鬼の悪者ぶり。
5 夫婦が留守のすきに	……夫婦は姫に教えられた場所に野老 ^{きやうら} をほりに行った。
天の邪鬼が姫を襲い、柱に縛りつける。	“あなむさんやな姫を肌着ばかりにはぎとりて”
6 天の邪鬼、姫に化けて機を織る	
7 夫婦、帰宅してこれを見つければ助け出す。	
8 同じ日に悪太郎が盗みに来たが様子をみて逃げる。	
9 毘沙門天が現れ、悪太郎をこらしめて去る。	……これまでのことは、全て村人を正直道に導くため。
10 姫は后裏に召される。	

まず一読して、物語としてつじつまの合わないところはないと思います。構成について種彦は序で、「竹取物語と桃太郎を合わせたる如く」と述べていますが、発端の部分は確かにそれらの昔話に共通するモチーフに違いありません。全体のストーリーの流れは、最後の毘沙門天の場面を除いて、ほぼ先にあげた伝承の瓜姫と一致していると思います。

次に細部ですが、明らかに昔話的でないと感じられるのは、「昔々あるところに」でなく、場所を限定している始まり、人物の詳しい描写。悪太郎と天の邪鬼、という二重の構造などの点です。けれども、「実のない香箱そっちへ行け、実のある香箱こっちへ来い」という悪太郎のはやしことばは、典型的な瓜姫の昔話にこそ出て来ませんが、『舌切り雀』で欲深な婆が大きな方のつづらを選ぶ場面などが思い出されますし、リズムもいかにも語りらしく思われます。そして、「きちちゃんとうん」とかすかなる音のして、一寸ばかりの姫が機を織ってい

る様、取り出せばすらすらと大きくなる様なども同様です。このような細部に至るまで、今日にまで伝わる伝承の昔話とよく一致しているものだと思います。おそらく種彦は、この物語の魅力が何処にあるのか、よく直観していたに違いありません。彼も戯作者の立場を忘れて、娘とともにこの昔話に聞き惚れたことがあって、その経験が期せずして彼に、グリム兄弟の再話に通ずる立場を取らせたのではないでしょう。また、露骨な勧善懲悪や靈驗譚を加えた点について種彦を弁護すれば、彼なりに、この古風な物語が当世の人達に受け入れられるようにと、腐心した結果なのだと思います。

絵草子の全編には五雲亭貞秀による挿絵が添えられています。呉羽姫が大奥のお女中か大名のお姫様みたいな様子なのが、私にはおかしく感じられます。この点ももしかすると、現代の一部の昔話絵本の背景にある配慮と似たものかもしれません。貞秀が仮りに現代の人なら、今の子ども達のために彼らの好みそうなマンガ的な表現で、まず絵によって子ども達の目を魅きつけようと試み

るのではないでしょうか。

ところで、種彦によって絵草子にされることで、かなり複雑になったこの物語も、娘豊の感受性には、ただ「きちちゃんとおんのおはなし」と、機織りの音に集約されてしまったところに、別の興味をおぼえます。豊が何歳だったのかは分りませんが、彼女の心には何よりも強く、この軽やかな機織の音が印象的に響き、まるでこの昔話のバックグラウンドミュージックのように思われたのでしよう。閑敬吾によると瓜姫の昔話のテーマは成女式で、機織りは婚姻の資格である、ということですから、豊の聞いた音はまさしく、物語の内において失われることのなかった昔話の核心の音、といえるのではないのでしょうか。実は私にも子どもの頃、同じ瓜姫の昔話を聞いて、似たような思い出があります。私の聞いたものは、始めの表にした西南地方の型のものでした。その話のうち、冒頭の部分は『桃太郎』に、最後の興入れの部分はグリムの『灰かぶり』（シンデレラ）に吸収されてしまつて、瓜姫の昔話と聞いて思い浮かぶのは、瓜姫と

アマノジャクの場面ばかりでした。題のことも、「アマノジャクと瓜子姫」とよんでいたと思います。

唐突なようですが、その頃、私は鬼というものをよく知っていました。それは春秋のお祭りに出てくる、村の「若けえし」が扮する鬼のことでした。ことに私の家の隣りが、「瀬の神」とよばれる、神木のある丘で、大昔祠のあった岬の名残りとして、鬼達のたまり場でしたから、赤黒や墨黒の面をかぶった鬼達が子ども心にどんなに恐かったか、よくおぼえています。大人と一緒に時は平気なのですが、ひとりの時は、まるで吠えつく野犬のそばでも通るような心地がしたものです。反面、そのような鬼の出る日こそ、私にとって一番の晴れ着を着せてもらえる日でもありました。袂の長いきれいな着物が晴れがましくて、喜んで表へ出るのですが、そんな格好をしていると、よけいに鬼が脅すものですから、（からかつていたのでしょうが）本当に困ってしまいました。

さて、ベッテルハイムは、『昔話の魔力』の中で、く

もっとも切実な問題を昔話の中に見つけ、その子にとって意味のあるメッセージを引き出してくることが重要なのだと述べています。そして、昔話が非常に象徴的な受け手によってどのようなにも解釈できる性質をもっているからこそ可能なのだと。私の場合、私の幼い無意識の中に、どのような切実な問いが潜んでいたのかは知る由もありませんが、瓜姫の昔話を聞かせてもらいながら、自分の知っている鬼のことをあてはめて、自分勝手に空想を広げつつ、子どもなりに答えを捜し求めているのだと思います。そして、私にとってこの昔話がアマノジャクと瓜姫の場面に集約されていたということは、そこにこそ、私の幼い心の問いの核心があったからにはかならないと信じています。

私の個人的な経験に触れることが長くなりましたが、私の場合にしても、豊の場合にしても、子どもがその子の内的な必要によって作りあげたイメージこそ、その昔話の、その子における意味なのだという、ベッテルハイムの指摘はあたっていると思います。小沢俊夫は、子ど

も達がそのような、昔話との真の出会いを体験するためには、是非とも「語り」という手段を通して出会うことが大切なのだと述べています。なぜなら、昔話は多くの語り手によって、長い時間にのせて語り伝えられているうちに、語るのにちょうど良いように磨きぬかれてきたのだからと。確かに自分独自のイメージを構成してゆくためには、なるべく視覚のような、強烈に意識を限定させてしまいう感覚によらない方が良いに違いありません。

その意味で、最近の昔話が子ども向けに再話され、さかんに絵本化されたり、TVの番組化されたりしている傾向をいま一度見つめ直す必要があると思います。同じ再話といっても、昔話が生活にまだ脈々と息づいていた「きちちゃん」とん」の時代とは条件が違います。語りとしての昔話がすたれてゆく一方の現代にあって、このような手段をのみ通して、本当に昔話の子どもの心にくいこんでゆく力が失われないものなのか、なおも昔話らしい伝承の形態が保持されてゆくものなのか、はなはだこころもとない気がしてなりません。

ニュージーランドにおける

就学前教育の歴史ならびに現状（六）

松川由紀子

五 現在の就学前教育

この章では、一九七〇年代以降の就学前教育の発展ならびに現状について詳細に述べたいと思う。一般的な発展とともに、就学前教育プログラムや養成面、行政面ならびに管理面、研究動向などの各分野について現状をみておきたい。また、この国独自の側面であるマオリとその就学前教育についても若干考察してみたい。

（1）一九七〇年代以降の就学前教育

① 就学前教育探究委員会の設置

六〇年代には、米国や英国などいくつかの国で積極的な就学前教育強化、拡充政策が提案されたり、実施されたりしていたが、ニュージーランドにおいても、こうした世界的動向のなかで就学前教育の充実を求める声が高まっていた。この国の代表的な就学前教育サービスの場であるフリーキンダーガルテンとプレイセンタ―は、政府から財政援助を受けていたが、このサービスの恩恵に浴していた者は、全三、四歳児のうち、ようやく三〇パーセント前後（六〇年代末）で、多くの者はそのサービスを受けることができなかった。そうしたなかで、就学前教育サービスの現状ならびに将来の方向性について

探究するために、七〇年、就学教育探究委員会が教育大臣によって設置された。

この委員会の探究事項は、一、（特に教育を要する子どもたちに注意して）就学前サービスの現状、二、教育目的ならびにプログラム、三、養成面、四、行政面、五、国家援助の程度ならびに就学前教育発展のための原則、優先事項を提示し、報告し、勧告することであった⁽⁴⁶⁾。委員会のメンバーは七名で、マッシー大学の教育学教授ヒル氏(C. G. N. Hill)を委員長にして、委員五名と秘書から成っていた。彼らは、就学前教育に特別な関心、知識をもつ有能な人材であったが、特定の就学前教育（保育）機関、団体を代表する者ではなかった。就学前教育に関係する一三三の団体、個人が、委員会に提案文書を提出するように求められ、そのうち三七の団体、個人は、さらに委員会に招かれ、補足説明をしたり、質問に答えたりした。また、委員会は、いろいろな機関、個人から関係資料を収集したり、公開討論会を開いたり、就学前教育（保育）サービスの現場をいくつか見学したりした。そして、七一年十一月、七十二項目の勧告事項を付した委員会報告書を教育大臣に提出した。

報告書は、政府、教育省による財政的、管理的、専門的援助の拡充の必要性について具体的に提示、勧告しているが、とりわけ、取り残されがちな者、地域に対する柔軟な、きめこまかいサービスの促進、キンダーガルテン教師養成所の教育大学への合併による養成面の充実、教育省の助言者の増加ならびに助言委員会の設置（全国的なものとは各地方に設置するもの）による専門的な指導、助言サービスの拡大の重要性などについて指摘している。勧告事項の多くは、その後、この国の就学前教育政策の基本的支柱として採り入れられた⁽⁴⁷⁾。

②フリーキンダーガルテン運動の展開

連盟は、就学前教育探究委員会に提出した提案文書の中で、養成所の教育大学への合併、一〇カ所以上のキンダーガルテンを管轄する協会に監督者の任命、などを要求した。養成学生数の増加とともに任意団体による養成所の維持、運営は大変な重荷となり、また、（教育大学に比較して）養成所は小規模なために、スタッフ、設備も限定され、幅広い充実した養成はむづかしかったので、連盟は教育大学との合併によって解決しようとした

のであった。監督者の任命を要求したのは、キンダーガルテン教師が専門的な指導、助言者を要望していたからであった。

結果的には、監督者の設置は認められず、その代わりに教育省の助言者の数が増加された（七〇年には八名の助言者がいたが、年々増加され、現在は三十二名である）。教育大学との合併は認められ、七五年二月には、四カ所の養成所が教育大学に統合され、政府がキンダーガルテン教師養成を引き受けることになった。すでに、七〇年代初め、ノースショア、ハミルトン、パーマストン・ノースの各教育大学にキンダーガルテン教師養成コースが設置され、質的にも量的にも教師養成は発展した。しかし、次第に養成数が就職者数を上回るようになり、そのため、七五年には五八〇名も養成されていたものが、年々減少され、現在はわずか一〇〇名にすぎなくなった。すでにノースショア教育大学は廃校となり、現在はいくつかの教育大学が廃校の危機に面している。

キンダーガルテンのサービスは、政府援助の増大とともに順調に拡大されていった。七四年には、全国が一〇地区の教育行政区（教育委員会区）に区分されたが、こ

の教育委員会が、キンダーガルテンやプレイセンターの建物の建設計画、敷地購入の監督ならびに建物管理をすることになり、また、教師給与の支給サービスを引き受けることになったので、協会の負担はかなり軽減されていた⁽⁴⁸⁾。建設費用も必要経費の五分の四が政府によって助成されることになり、低利の貸付金制度も設けられ、協会ならびにセクション運営のための助成金も交付されていった。そのため、現在では、全必要経費の約八十六パーセントが政府によって助成されるまでになった。また、地域の要求に応ずるために、すでに幼児数五〇名（午前・午後のセクション各二十五名）小規模のキンダーガルテンも認められていたし、全建設費を政府が負担する優先計画は、マオリ居住区に関係なく、必要のある地域には適用されることに改正されていた。そして、七十四年には、特別な教師のもとに五名以内の障害児を受け入れる、という障害児グループの設置がキンダーガルテン内に認められ、障害児の統合教育がさらに発展していくことになった。

こうした政策とともにキンダーガルテンの設置数も順調に増加し、七〇年には三〇五カ所であったが、八〇年

には五二六カ所と増大した。ここ最近では、出生率の低下が著しく、そのため新設数は低下している。現在は、三歳児の約二十五パーセント、四歳児の約五十五パーセント、三、四歳児の約四〇パーセントがキンダーガルテンサービスを受けている。

しかし、現在のキンダーガルテンに問題がないわけではない。まず、二部制の問題である。キンダーガルテンは、午前（五回）と午後（三回）のセッションに分けられているが、一般に三歳児は午後のセッションに多い。はたして、三歳という幼い子どもにとって、午後の時間はキンダーガルテン教育にふさわしいものであろうか、疑問である。次は、両親参加の問題である。フリーキンダーガルテン運動の歴史はキンダーガルテン教育における政府参加の歴史とも言えるわけであるが、現在は、政府が財政、管理、指導面に大幅に関与することになったために、ボランティアが自ら政策を決定する機会はごくわずかに残されているにすぎないので、両親をキンダーガルテンにひきつけていくことがむづかしくなった⁽⁴⁹⁾。運動は、いかにして両親参加を促進させていくのかについて真剣に考えなければならなくなってきた。また、教

師養成コースも二カ年のままで、欠して十分なものではない。こうした問題をどのように解決して、さらに発展していくのであろうか。当然ながら、婦人労働ならびに国家財政の動向などに影響されるだろう。

③プレイセンタ―運動の展開

プレイセンタ―は六〇年代に急増したために、連絡、養成、指導面にあたる人材がとりわけ必要と考えられるようになり、連合は、七〇年に就学前教育探究委員会にそうした人材の任命を要望する提案文書を提出した。しかし、提案は受け入れられず、教育省の助言者の増加という形で代用させられた。

七〇年代、キンダーガルテン運動と同様にプレイセンタ―運動に対しても政府援助は増大した。優先計画、教育委員会による（専用）建物の建設計画、敷地購入、建築監督ならびに建物管理についてはキンダーガルテンと同じ扱いをされることになった。また、専用建物の建設費用の五分の四、設備費用の三分の二が政府によって助成されることになり、養成面への助成金も導入され、その他の助成金も増額されていった。こうした政府援助の

増大とともに、人々の関心は、次第に連絡、養成、指導面から専用建物へと移っていった。

プレイセンターの設置数は、七〇年に五四二カ所であったが、七五年には六九六カ所となり、最近は減少気味である（八二年には六七八カ所で、全三、四歳児の約十三パーセントがプレイセンターのサービスを受けた）。

なぜ、減少気味なのであろうか。いろいろな理由が指摘されている。プレイセンターは比較的人口数の少ない地域に多く設けられているので、出生率の低下による影響を受けやすい。人々は、週五回のセッションである学校タイプのもの（キンダーガルテン）を求めているのかもしれない。両親参加を嫌うのかもしれない。最近では、婦人のフルタイム労働も受容的に考えられるようになり、単親家庭も一般的になり、全日保育の場を要求する人々が増加したためかもしれないし、また、かつてほど両親教育の必要もなくなったのかもしれない。このような指摘は的をえたものかわからないが、新しい考え方、状況に合わせてプレイセンターの理念、実際を変化させていくことも必要になっているのかもしれない。

若いカップルが子育てにあたる時、プレイセンターは

確かに有益な援助となり、多くの母親が、運動に参加することによって、子どもの発達、教育について学習するだけではなく、自らの継続教育の必要に目覚めていった。理解力、指導力を高め、知識を深め、運動内外の指導者として活躍したり、教育省の助言者や教育大学のスタッフ、あるいは研究者に助成していく者もみられた。

しかし、半面、父親が職業生活、社会生活のなかで成長（あるいは昇進）していないと、家庭生活の向上どころか家庭の危機をもたらすことも、皮肉にも、みられた⁶⁰⁾。母親だけではなく両親がともに参加していくことが重要であるが、そのためには、（スウェーデンのように）父親が子育てに参加することはきわめて自然のことで人間的な営みである、という考え方が理解されていくことが大切であろう⁶¹⁾。さらに、男女平等の発想が理解されることが大切で、また、父親もとれる育児休暇制度や労働時間短縮化などの政策が整備されれば、父親も子育ての喜びを味わうことがより可能となる。そうしたなかで、両親参加のプレイセンターと母親のフルタイム労働との共存が可能となるような新しいプレイセンター運動が展開されていくことができるのではないだろうか。

④ 保育センター運動の展開

就学前教育探究委員会の報告書には、近年の保育所要求の増大現象を認めて、保育センターのスタッフならびにプログラムの向上が必要であることが記されているが、残念ながら、具体性を欠いている。

七二年に、保育センターは教育省児童福祉省の管轄下に移管された。このことは、保育センターは就学前教育からさらに切り離されていくのではないか、という懸念を人々に与えることになった。七三年に設置された、婦人の役割に関する委員会は、保育は教育を重視することが大切であるので、保育センターを社会福祉省から教育省に移管するように報告書（七五年）のなかで勧告したが、同様の勧告がいくつかの婦人問題に関する委員会、会議でも提出されていた⁽⁵²⁾。七五年の国際婦人年に開かれた、教育ならびに男女平等に関する会議（教育省と婦人問題委員会の主催）では、さらに具体的に、（非営利の）保育センターに対する政府の財政援助、専門学校や通信教育校でのスタッフ養成（パートタイム、フルタイム）の開始などを要望し、勧告した⁽⁵³⁾。その後、教育

省との間でスタッフ養成のプログラムについて討論がなされ、七六年には保育コースが通信教育校に開設された。さらに教育省の援助の下で、ウェリントンならびにオークランドの専門学校に保育センタースタッフの養成コースが設けられ、教育大学や総合大学のスタッフが協力することになった。そのため、次第にA級の保育センターが増加していった。

七六年に、婦人問題委員会は、婦人ならびに社会的、経済的発達に関する会議で「国家サービス大臣は、国家サービスの優先事項として効果的な幼児教育、保育政策について、婦人団体を含めて関係する諸機関と協議するように」勧告し、そして、そのための作業グループの設置を要求した。七七年に、国家サービス委員会作業グループが設置され、八〇年には最終報告書が国家サービス大臣に提出された。しかし、当初の要求の意図が作業グループに十分に理解されなかったために、この報告書は、さまざまな就学前サービスの発展、現状についての記述が中心となっていて、具体的、革新的な勧告を欠いていた。

保育センターのなかでも、とりわけ保育所に対する要

求は切実なものであるが、現在、三、四歳児のわずか三パーセント足らずの者が保育所を利用しているにすぎない。オークランドやウェリントンでは保育所不足は続いているが、一方で、親類や友人にあずけることをむしろ強く希望する者が多いのも事実のようである。保育センターには保育所とともにさまざまな教育、保育機関が含まれているので、統一的な政策はむづかしく、保育センター協会の活動も（キンダーガルテンやプレイセンタ―に比べると）やりにくいようである。しかし、どこでどのような就学前のサービスがなされていても、基本的には子どもの要求は同じである。就学前の幼児に対する多様なサービスならびにスタッフ養成は同じ省の下で柔軟になされることが望ましいことは、言うまでもない。

⑤多様な就学前教育サービスの展開

六〇年代後半に開始されたファミリープレイグループ運動や小学校の就学前クラスの設置は、ともにマオリ居住区にみられたものであるが、七〇年代には量的に拡大されていた。また、七八年以降、七十五カ所の（非営利の）プレイグループを対象に助成金が交付されること

になった。なお、教育省の助言者によって、一般に、プレイグループには教材設備が貸し出されている。

就学前教育委員会は、特に教育を要する子どもたちのために柔軟な、きめこまかいサービスを促進するように勧告したが、七〇年代には、さらに多様なサービスが開始されていた。主なものをいくつかみてみよう。

七三年に、YMCAが移動サービスを始めた。これは、車に教師とともにさまざまな教材、設備を積んで、就学前教育の重要性を啓蒙しつつサービスを行なうために田舎をまわっていくものである。七七年以降は、政府がこうした教師の給与を支払うようになり、キンダーガルテンと同等の助成をするようになった。教師は、関係する地域のキンダーガルテン協会に所属していた。現在、この移動サービスは、いくつかの町を拠点にして、教育省、YMCA、キンダーガルテン協会の代表を含む委員会によって運営されている⁽⁵⁴⁾。

七四年には、オークランドに三名の地域ブレスクールワーカーが任命された。このワーカーは、取り残されがちな地域で就学前教育の重要性を個別訪問して啓蒙する任務をもっていた⁽⁵⁵⁾。当時、オークランドには南太平洋

諸島からポリネシア系の移民が急増していたが、こうした移民やマオリの家庭を訪問して、その子どもと遊んだり、就学前教育に関する基本的な内容を説明したりした。そして、ファミリープレインググループを組織するように提案したり、もし地域に既存の就学前サービスの場があれば、そこに参加するように助言した。三名のワーカーは、サモア人、マオリ、ヨーロッパ系各一名で、パートタイム労働（週十五時間の勤務）であった。七八年には、この三名はフルタイム（週二十五時間労働）になり、さらに（国内に）十五名が増員され、七九年にもさらに一〇名が増員されて、二十八名のワーカーとなった。いずれもフルタイムであるが、四十五名で労働量を共有していた。こうしたワーカーの制度は、柔軟性をもっている。さまざまな地域の要求に合うことができた。現在、ワーカーの助言で運営されているプレインググループは約二〇〇もあり、約一七〇〇名の幼児が参加している（八一年には三十五名のワーカーとなり、現在、六〇名で共有している）。

七六年には、通信教育校が就学前教育サービスを開始した。これは、遠隔地の家庭に教材を送り、教師がその

使用法を説明したり、就学前教育に関する考え方を親に教育したりするサービスである。キンダーガルテン教師がスタッフとして指導にあたっているが、教師による通信とともに各家庭間の情報交流の場（紙面）もあり、また、教師による家庭訪問もなされている。この通信サービスも急速に拡大されていき、現在は、約四八〇名の三、四歳児がこのサービスを受けている。

こうして、七〇年代以降、さまざまな地域の要求に応じた多様な就学前教育サービスがさらに展開されていき、政府による財政的援助ならびに教育省の助言サービスが増大されていったために、就学前サービスを受ける幼児の割合も増加していった。七〇年には、全三、四歳児のうち約四〇パーセントの者が何らかのサービスを受けていたが、八二年には、三歳児の約五十三パーセント、四歳児の約八十五パーセント、三、四歳児の約六十九パーセントの者が受けていた。人口密度が低い国であるので、サービスの拡張は容易なことではないが、それを国家と任意団体とが協力して実現してきた。営利事業としてなされているもの（私的な機関）はごくわずかにすぎない。

表1 キンダー・ガルテンとプレイセンターの設置数の年次推移(1945-1982)

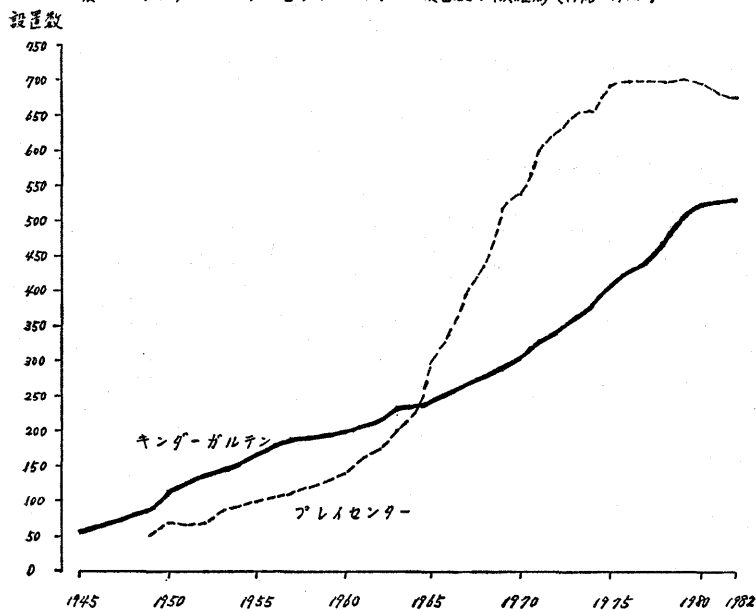


表2 キンダー・ガルテンとプレイセンターの幼児数の年次推移(1945-1982)

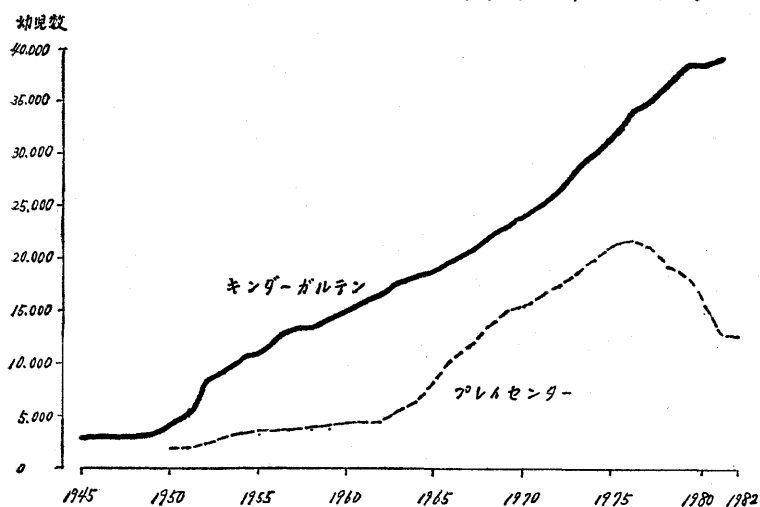
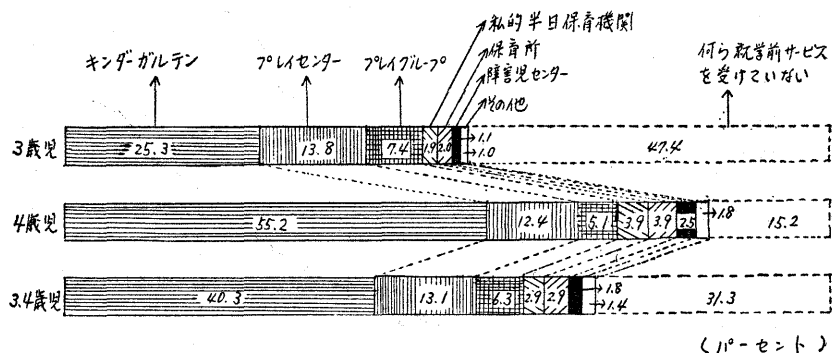


図1 現在の三、四歳児の受ける就学前サービスの内訳(1982)



最後に、キンダーガールテンとプレイセンターの設置数ならびに幼児数の年次推移、現在の三、四歳児の受ける就学前サービスの内訳を図表に示してみよう(表1、2図1)。

(山口女子大学)

註

(46) Report of the Committee of Inquiry into Pre-school Education, (Hill Report), Wellington: Government Printer, 1971, p. 7.

(47) 七〇年代の具体的な就学前教育サービスの拡充について
Michael Cooper: The Development of Pre-school Services in New Zealand 1970-1980, Unpublished Dip. Ed. thesis, Massey University, 1981, に詳しい(なお、筆者は教育省の教育官)。以下の記述もこれを参照した。

(48) The Cory-Wright Report; op. cit., p. 4.

(49) Meade; op. cit., pp. 112-123.

(50) Rosslyn Roberts; New Zealand Playcentres and Parent Involvement, Mimeo, 1976, p. 33. なお、筆者は、オーストラリアのプレイグループ助言者で、これは研究旅行報告書である。

(51) なお、スウェーデンの就学前教育については、拙稿「ス

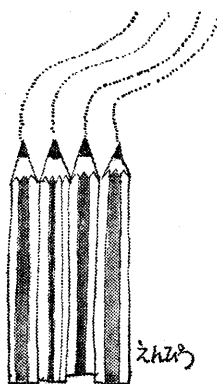
ウェーデンの就学前教育」(山口女子大学研究報告、第7号、一九八一年)を参照していただきたい。

② Geraldine McDonald; The Story of a Recommendation about Early Childhood Care and Education, in M. Clark (ed.), The Politics of Education in New Zealand, Wellington: New Zealand Council for Educational Research, 1981.

③ Department of Education; Education and the Equality of the Sexes, Wellington, 1976, p.58.

④ The Cory-Wright Report; op. cit., pp. 13-15.

⑤ Rindsey Rea; Community Pre-school Workers in New Zealand, in Australian Journal of Early Childhood, vol. 7(4), 1982. なお、筆者は教育省の助言者。



子どもの頃、夢中になって遊んだ「鬼ごっこ」は、改めて考えてみると不思議な遊びであった。じゃんけんで「鬼」が決まると、あとは、追いつ、追われつひたすらなる疾走。そして、不運な誰かが掴まると、新しい「鬼」が誕生して役割が逆転し、再び、追いつ、追われつがくり返される。たったそれだけの単純な遊びながら、何故か無性に楽しくて時の経つのを忘れた。

さて、この遊びの不思議さの第一。それは、遊びの空間が自ずからある範囲に限定されていたことだ。しかも、どこからどこまでと相談したり、明瞭に区切ったりするわけでもないのに、何となく、皆がそれを納得し、了解し合っていた。たとえば、裏の空地が選ばれたとして、その向こうの住宅地までは駆け抜けなかったし、神社の境内では、何故か鳥居の外へは出ずに、内側だけを駆け廻った。

そして、不思議さの第二。子どもたちは、みんな、息を切らし、精一杯に走り廻るにもかかわらず、いつか、誰かが、ちゃんと掴まるような仕組みになっていた。仮りに、足のおそい子が「鬼」になっても、永遠に「鬼」であり続けることは稀であった。それも、格別、「手加減」とか「哀れみ」などというこざかしいことではなく、極く自然の成り行きとして、誰かが掴まり、「鬼」は交替した。

これは、遊ぶ子どもたち相互に通い合う絶妙の呼吸、まさに「啐啄同時」とでもいうべき、心の通い合いであったろう。ルールとか、約束などという硬質のものではなく、すべて、「遊ぶ身体」が、楽しく遊び続けるための、相互主体的な関係の発現である。私たちは、「教育」という名の下に、こうしたありようを寸断しているのではないだろうか。いまだ、このことに対して、敏くありたいと思う。

(H)

幼児の教育 第八十三巻 第四号

四月号 ◎

定価三〇〇円

昭和五十九年 三月二十五日 印刷
昭和五十九年 四月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

●本紙御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

保育者への推薦図書!!

新たな保育を探る

保育の探求

●編集 坂元彦太郎・岡田正章・神澤良輔・河邊杲・林健造・森上史朗

泥まみれの現実のなかに、幼児の豊かな可能性を信じていく——このロマンこそ、生きた教育の原点ではないか。本書は、幼児の実体を直視し、保育の現代化を探る近來の好著です。

A5判・428頁・定価2,000円

これからの保育(全6巻)

大場牧夫・海 卓子・平井信義・本吉圓子・森上史朗 共著

●あなたの保育を深め充実させます。

「保育」を原点にもどして考え直し、子どもたちの自主性の発達を助けたい。自由で生き生きとした保育を目指して保育者自らが高まりたい。

シリーズ「これからの保育」は、

1巻「遊び」とは何だろう 2巻「自由」とは何だろう

3巻「課題」とは何だろう 4巻「生活」とは何だろう

5巻「集団」とは何だろう 6巻「総合」とは何だろう

という命題について実践をふまえて重ねた討論から問題を提起します。

A5軽装判・各256頁・セットケース入り・セット定価9,600円

ぐわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

フレーベル館の8大月刊誌

内容がさらに充実!! 団体価格は、据え置きといたしました。

①—情操

キンダーブック

年少・年中児向けの絵本で、夢のある心たのしいお話は情操を豊かにし、創造力を高めます。

(ワイド画面) 団体購読価 月250円

キンダー おはなしえほん

幼児の心を生き生きと育てる美しく感動的なお話は、繰り返し読んで楽しめます。

(上製本) 団体購読価 月300円

②—観察

キンダーブック

年長児向けの絵本で、観察の眼を育て心情を豊かにする魅力いっぱいの観察絵本です。

(ワイド画面) 団体購読価 月250円

大きく見やすくなりました!!

がくしゅう おおぞら

子どもの知的欲求に応えながら、よく考える子、遊び上手な子に育てる絵本です。

(総合絵雑誌) 団体購読価 月300円

しぜん—キンダーブック③

自然のようすや、その不思議がよくわかるよう編集された好評の科学絵本です。

(上製本) 団体購読価 月300円

ころころえほん

園生活で初めてふれる、2～3歳児のための明るい絵本。幼ない子とのスキンシップが楽しめます。

(厚紙製本) 団体購読価 月220円

キンダーメルヘン

年少・年中児向けのお話絵本で、“夢とゆとり”が生まれるよう配慮されています。

(厚紙製本) 団体購読価 月220円

保育専科—今月のカリキュラム—

先生方の悩みに応える実践的な保育雑誌です。また別冊は年3回発行いたします。

定価400円 (別冊とも年間7,800円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館